

長岡京市文化財調査報告書

第38冊

1998

長岡京市教育委員会

編集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

第38冊

1998

長岡京市教育委員会

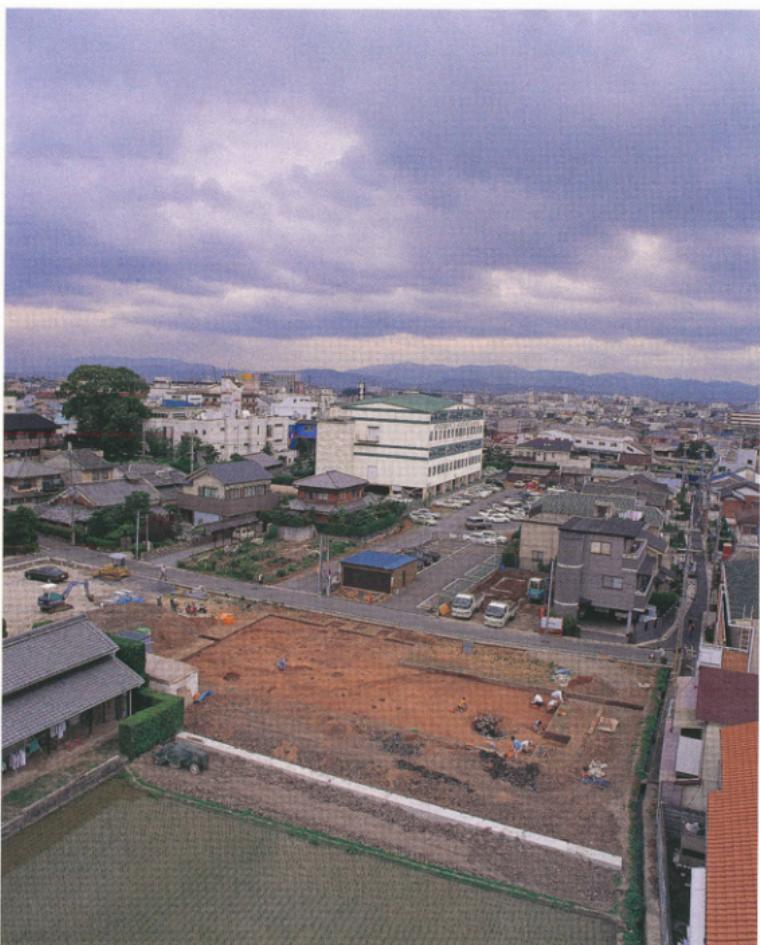
編集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

金原寺跡第1次調査

卷頭図版
一



金原寺跡第1次調査地と土御門天皇金ヶ原陵（北東から）



調査地近景（中央の建物一帯が開田城跡）



(1) 青白磁蓋



(2) 漆器椀

序 文

昨年4月30日、「長岡京」研究の第一人者であった中山修一先生が80有余年の生涯を閉じられました。この報は、私たち地元市民にとって、痛恨の極みでありました。

先生は、昭和29年暮れに長岡宮会昌門跡を皮切りに自らの私財を投じて発掘調査に賭けて来られました。行政が原因者負担制度の中で発掘調査を行うようになってからは、調査現場を指導される一方で、複雑に利害が絡み合う地元との調整や交渉に精力を注がれました。この仕事には、遺跡の重要性や保護を唱える学者としての苦労だけではなく、地元出身者としての計り知れない精神的苦痛を伴っていたと存じます。

こうした先生の地道な努力が原動力となり、長岡京が「現の都」として学校の教科書に掲載されるなど全国的に知られるようになりました。また、本市での埋蔵文化財調査体制の確立や遺跡保護への途も切り開かれてきました。21世紀を目前にした今、改めて先生の遺徳を偲ぶとともに、ご遺志を継ぎ、長岡京をはじめとした文化財の調査研究、保護に一層努めていきたいと存じます。

さて、ここに刊行する報告書は、国庫補助事業として平成9年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。なかでも、天神一丁目での調査では、中世の井戸から多数の土器や木製品が出土し、開田集落の生活の一端を知る貴重な資料となりました。また、金原寺跡の調査を初めて実施し、寺が建立された13世紀ごろの土坑を検出しました。さらに、今里車塚古墳では、前方部の周濠部分で初めての発掘調査を行い、古墳の形を復元する上で貴重な成果を得ることができました。

最後になりましたが、調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターをはじめ、調査のご指導をいただいた諸先生方、発掘調査にご理解、ご協力をいただいた土地所有者や近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成10年3月

長岡京市教育委員会

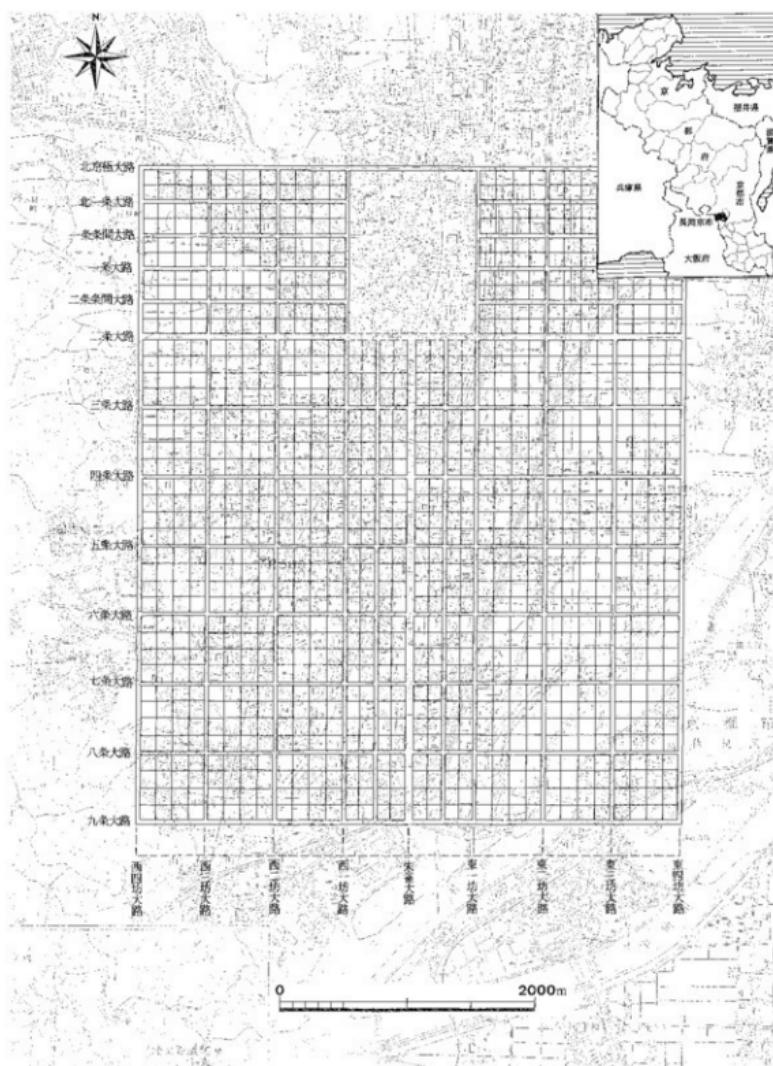
教育長 小西誠一

凡　　例

1. 本冊は平成9年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほかの発掘調査の概要報告である。調査地は付表1のとおりで、位置は第1図に示した。
2. 長岡京跡の調査次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』による旧字名をもとにした地区割に従った。
3. 長岡京跡の条坊復原については、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号(1992年)の復原にしたがった。
4. 本書に使用する地形分類は、特に断わらない限り「長岡京市域地形分類図」「長岡京市史資料編一」(1991年)に従った。
5. 本書において、長岡京跡範囲内の調査で使用している遺構番号は、長岡京跡右京(左京)の調査次数+番号であるが、報告によっては調査次数を省略している場合がある。例えば「SD 01」などの場合は、調査次数を冠した「SD〇〇〇01」が正式な番号である。
6. 各調査報告の執筆者は各章のはじめに記した。
7. 本書の編集は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが行った。
8. 現地調査及び本書作成に至るまでの整理・製図作業には、下記の方々のご協力を得た。また、遺物写真の撮影には、写房楠華堂楠本真紀子氏のご協力を得た。
 調査作業員 佐藤昭三、高瀬嘉一郎、竹部 疊、堤 昭治、中尾文行、中野純明、平木秋夫、前田 正、植田博和、辻 純一、若林礼次郎
 技術補佐員・調査補助員・整理員 池庄司淳、上野恵己、尾崎みづ樹、岡本弓美子、末原智子、小島鉢子、佐藤陽子、田中京子、谷村雅世、柳谷智香、橋田邦夫、正木志保、光永直美、向山智栄、村田美智子、森 昌彦、森田徳子

付表1 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	土地所有者	現地調査期間	調査面積	備考
金原寺跡 第1次		長岡京市 金ヶ原金原寺9-4	川戸孝征 川戸初子	1997年6月10日 ～ 1997年6月27日	110m ²	
走田古墳群 第3次	7CKPM-E-4	長岡京市 奥海印寺明神前31	宗教法人 寂照院	1997年12月15日 ～ 1998年1月23日	111m ²	海印寺跡
浄土谷遺跡 第1次		長岡京市 浄土谷箱谷32、36他	湯川シゲ	1998年1月27日 ～ 1998年1月29日	14m ²	
長岡京跡右京 第566次	7ANKNZ-9	長岡京市 天神一丁目34-1	西小路行雄	1997年5月21日 ～ 1997年7月2日	350m ²	開田城ノ内遺跡
長岡京跡右京 第582次	7ANISF-1	長岡京市 今里庄ノ瀬32	能勢 明	1997年10月27日 ～ 1997年12月26日	110m ²	今里車塚古墳 今里遺跡



第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000)

本文目次

第1章 金原寺跡第1次調査概要.....	1		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			
第2章 走田古墳群第3次・海印寺跡第4次調査概要.....	5		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 まとめ
第3章 済土谷遺跡第1次調査概要.....	9		
1 はじめに	2 調査経過		
第4章 長岡京跡右京第566次調査概要	11		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			
第5章 長岡京跡右京第582次・今里車塚古墳第9次調査概要	37		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 まとめ

図 版 目 次

巻頭図版 一 金原寺跡第1次調査地と土御門天皇金ヶ原陵（北東から）

巻頭図版 二 調査地近景（中央の建物一帯が開田城跡）

巻頭図版 三 (1) 青白磁蓋

(2) 漆器椀

金原寺跡第1次調査

図版 一 (1) 発掘調査地遠景（南西から）

(2) 発掘調査地と土御門天皇金ヶ原陵（北東から）

図版 二 (1) 発掘調査地全景（南西から）

(2) 発掘調査地全景（南東から）

図版 三 (1) 土坑 SK01（西から）

(2) 土坑 SK01（南から）

走田古墳群第3次・海印寺跡第4次調査

図版 四 (1) 走田10号墳横穴式石室全景（南東から）

(2) 横穴式石室全景（北西から）

(3) 奥壁付近の状況（北東から）

長岡京跡右京第556次調査

図版 五 調査地全景（北から）

図版 六 (1) 井戸 SE01検出状況（南東から）

(2) 井戸 SE01（東から）

(3) 井戸 SE08遺物出土状況（南東から）

(4) 井戸 SE08（南東から）

図版 七 (1) 柱穴検出状況（北から）

(2) 井戸 SE01断面（東から）

(3) 井戸 SE01のたもと横樋

(4) 井戸 SE01の柄杓と獸骨

(5) 土坑 SK05断面（西から）

図版 八 土師器・瓦器

図版 九 土師器

図版一〇 瓦器・施釉陶器

- 図版一一 瓦器
 図版一二 底部穿孔土師器皿と木製品
 図版一三 木製品－1
 図版一四 木製品－2
 図版一五 軒瓦・石器・石製品
 図版一六 鉄製品と獸骨

長岡京跡右京第582次・今里車塚古墳第9次調査

- 図版一七 調査地遠景（北西から）
 図版一八（1） 第1トレンチ中世遺構全景（北東から）
 　（2） 平安時代掘立柱建物SB10（東から）
 図版一九（1） 今里車塚古墳周濠北辺（南東から）
 　（2） 調査地近景（西から）
 図版二〇 今里車塚古墳周濠出土木製品
 図版二一 今里車塚古墳周濠出土木製品と柄部分
 図版二二 今里車塚古墳周濠出土木製品と溝SD12出土側板・杭

挿 図 目 次

第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000)	iii
金原寺跡第1次調査	
第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図 調査地土層図 (1/80)	3
第4図 検出遺構図 (1/100)	3
第5図 土坑 SK01平面・断面図 (1/50)	4
走田古墳群第3次・海印寺跡第4次調査	
第6図 発掘調査地位置図 (1/5000)	5
第7図 調査直前の状況 (南東から)	6
第8図 第1区全景 (南東から)	6
第9図 走田10号墳検出状況 (南東から)	7
第10図 第2区全景 (東から)	7
第11図 第3区全景 (北から)	7
浄土谷遺跡第1次調査	
第12図 発掘調査地位置図 (1/20000)	9
第13図 調査地周辺図 (1/600)	10
第14図 出土遺物 (1/2)	10
第15図 調査地全景 (東から)	10
長岡京跡右京第566次調査	
第16図 発掘調査地位置図 (1/5000)	11
第17図 小学生の体験発掘	12
第18図 調査地東壁土層図 (1/40)	12
第19図 検出遺構図 (1/150)	14
第20図 土坑 SK05断面図 (1/40)	15
第21図 井戸 SE01実測図 (1/50)	15
第22図 井戸 SE08実測図 (1/40)	16
第23図 石を据えた柱穴実測図 (1/40)	17
第24図 据立柱建物 SB09実測図 (1/100)	18

第25図 井戸 SE01出土土器実測図 1 (1/4)	19
第26図 井戸 SE01出土土器実測図 2 (1/4)	21
第27図 井戸 SE01出土土器実測図 3 (1/4)	22
第28図 井戸 SE01出土陶磁器実測図 (1/4)	24
第29図 土坑 SK06・井戸 SE08出土土器実測図 (1/4)	24
第30図 その他の出土遺物実測図 (1/4)	24
第31図 井戸 SE01出土木製品実測図 1 (1/4)	25
第32図 井戸 SE01出土木製品実測図 2 (1/4)	26
第33図 井戸 SE01出土木製品実測図 3 (1/4)	27
第34図 井戸 SE01出土木製品実測図 4 (1/6)	28
第35図 井戸 SE01出土木製品実測図 5 (1/6)	29
第36図 井戸 SE01出土石製品実測図 (1/4)	30
第37図 井戸 SE01出土鉄製品実測図 (1/2)	30
第38図 周辺調査地位置図 (1/2000)	32
第39図 開田地域の旧地形と条坊復原 (1/5000)	33
第40図 土器皿の板状圧痕拓影 (1/2)	34

長岡京跡右京第582次・今里車塚古墳第9次調査

第41図 発掘調査地位置図 (1/5000)	37
第42図 第2トレンチ土層図 (1/100)	38
第43図 中・近世の遺構 (1/200)	39
第44図 古墳時代後期から平安時代の遺構 (1/100)	40
第45図 今里車塚古墳関連遺構 (1/100)	41
第46図 今里車塚古墳に関する周辺地の調査成果 (1/1000)	42

付 表 目 次

付表1 本書報告調査一覧表	ii
付表2 開田地域の主な調査成果一覧	13
付表3 井戸 SE01の遺物破片数量	34
付表4 報告書抄録	43

第1章 金原寺跡第1次調査概要

1 はじめに

- 1 本報告は、1997年6月10日～1997年6月27日まで、長岡京市金ヶ原金原寺9-4において実施した金原寺跡の発掘調査に関するものである。
- 2 本調査は、上記地点で計画された個人住宅の建設に伴うものである。建設工事は敷地内を盛土するもので、地下遺構への影響は少ないものと見られるが、当地が金原寺跡推定地の範囲内にあたるところから、関連遺構の有無を確認する目的で実施したものである。
- 3 調査は平成9年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター木村泰彦が担当した。
- 4 調査実施にあたっては、土地所有者の川戸孝征氏、および近隣の森本智一氏より水道水の供給をはじめ数々のご援助をいただいた。
- 5 調査後の図面・遺物整理は、坂根 聰、村田美智子をはじめ多くの方々の協力を得た。
- 6 本報告の執筆および編集は木村が行った。



第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

今回の調査地は、阪急長岡天神駅の西約2kmの西山山地から北東に延びる丘陵上に位置している。付近での標高は75.5mで、長岡市を初め乙訓地域一円をほぼ眺望できる場所にある。南側には住宅地が迫っているが、今も周辺は自然景観を良く残している。地形分類上は大阪層群からなる丘陵地にあたり、北と南側には開析谷が存在している。現在は丘陵を棚状に削平し水田としての利用がなされており、水源は南西180mにある開析谷を塞き止めた金原寺池である。調査地はこの丘陵上にある棚田のうち、最も大きな水田の南東隅にあたり、この水田の存在する平坦部の西側のさらに一段高くなった場所に土御門天皇金ヶ原陵がある。このためこの大きな平坦部付近が金原寺跡と推定されている。

金原寺は本来土御門天皇の供養のため、母である承明門院源在子が営んだ法華堂のこと、金原御堂とも呼ばれ、金原寺は後世の名称である。土御門天皇（当時は上皇）は、承久三（1221）年閏十月に承久の乱のために父後鳥羽上皇、弟順徳上皇が配流されるおり、乱には関与しなかつたにもかかわらず、自ら申し出て土佐国に流された。2年後の貞応二（1223）年五月に阿波国に移り、寛喜三（1231）年十月に同地で37才の生涯を閉じた。火葬に付された後、遺骨は京に帰り、天福元（1233）年十二月に金ヶ原の法華堂に安置された。法華堂の造営地になぜ金ヶ原が選ばれたのかは定かではないが、土御門天皇あるいは承明門院に何らかの所縁があったものとも考えられる。その後仁治三（1242）年に土御門天皇の息子が後嵯峨天皇として即位すると復権し、後鳥羽天皇大原陵と共に土御門天皇金原陵も山陵使の派遣先に加えられることとなった。同年十月には金原御堂で法要が国忌として行われ、寛元二（1244）年にも十三回忌の法華八構が行われている。その後も寛元三（1245）年、文永五（1268）年に山陵使が派遣されたことが見えるが、以後記録は途絶える。この法華堂もいつの頃か廃絶したらしく、土御門天皇陵は別の場所に考えられるなど混乱が生じていたが、江戸時代に至り現在の場所に比定された。その時点で大石があらわれた石塚と呼ばれる小丘を法華堂の跡と推定している。また法華堂は塚の上に建ち、これとは別に陵と法華堂を管理する金原寺という寺院が陵の東南にあったとしているが、その根拠は不明である。^(註) 本調査はこれらの周辺施設を含めた金原寺に関する資料を得ることを目的としている。調査地は個人住宅建設予定地のうち、ある程度地下遺構に影響があると思われる建物部分に限定し、既に擁壁工事が行われていた敷地に沿って平面台形のトレントを設定し、小型パワーショベルにて整地土・水田耕作土を除去、以下は人力にて掘り下げを行った。また遺構の検出に伴い、部分的に拡張を行った。総調査面積は110m²である。

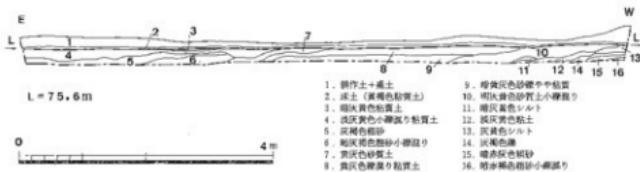
3 検出遺構

調査地は既に擁壁工事が行われていたため、中央部は耕作土の大半がすき取られており、床土が露出していた。またコンクリート擁壁周辺には部分的に整地用の盛土がなされている。第3図に示したものは、トレント東壁の土層図で、厚さ0.2mの耕作土と0.02mの床土を除去した段階

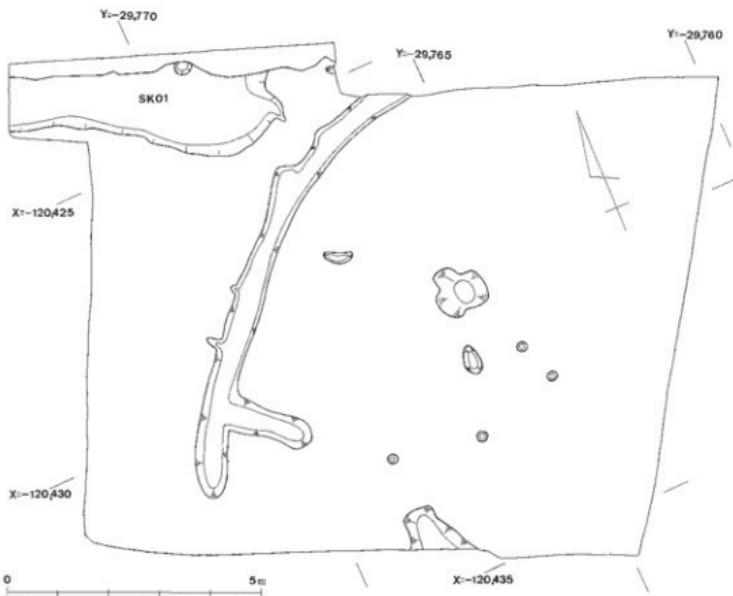
で遺構面に至る。この遺構面は黄灰色～赤褐色の砂礫ないし粘質土で成っており、大阪層群と見られるものである。断面では東に傾斜した堆積状況が看取される。これらは水田開墾時に削平されたものとみられ、ほぼ平坦面を成しており、標高は75.6mである。

この面では、後述する土坑以外には造成時の搅乱および排水溝と、水田耕作に伴うと見られる小ピットが見られたのみである。

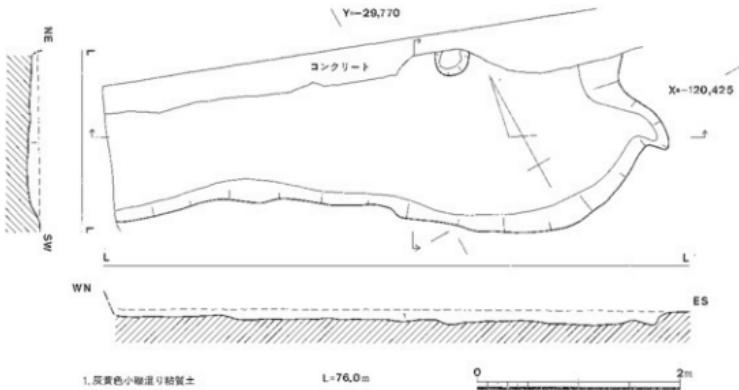
土坑 SK01 トレンチ北西隅で検出された浅い落ち込み状のもので、溝あるいは土坑と見られるが調査地外に広がっており、全形は不明である。開墾時にかなり削平を受けており、深さは0.1m、底部は平坦で、南西の肩はわずかに湾曲し、中央北寄りには径0.3m、深さ0.1mの小ピットが見られる。埋土は灰黄色小礫混じ粘質土で遺物は極めて少量・小片であった。



第3図 調査地土層図 (1/80)



第4図 検出遺構図 (1/100)



第5図 土坑SK01平面・断面図(1/50)

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整地土、床土、土坑出土のものに分けられるが、いずれも小片・少量で図示できるものはない。このうち整地土からは棟瓦、唐津系陶器、信楽焼壺、肥前系染付磁器片等が出土しているが、整地土は他所から運ばれてきたもので、詳しい状況に関しては不明である。また床土からは、土師器、肥前系染付磁器、唐津系陶器、瀬戸・美濃系陶器の小片および白磁の小片が出土しており、水田の開墾が近世頃に行われた可能性を示唆している。

土坑SK01出土遺物 瓦器片、土師器片、三足羽釜脚部片が出土しているが、いずれも小片であり、表面の調整も看取できない。このうち瓦器はおそらく碗の体部片と見られ、比較的厚みがあり、13世紀代のものと推定される。

5 まとめ

今回の調査では13世紀代と見られる土坑状の落ち込みが検出されたが、これは金原寺に関する何らかの遺構の可能性が高いものといえる。天福元(1233)年十二月の落慶供養のおりには、承明門院一行は近くの円明寺に宿をとっており、この時は法華堂のみが完成したものと思われるが、その後何度も大規模な法要が行われていることなどから、周辺施設などの整備が進んだものと見られる。これら文献に見える行事はすべて13世紀代に集中しており、今回検出された土坑SK01はこれらに関連するものとも考えられるが、部分的な検出であるため確定することは困難である。しかしながらなぜこの地に法華堂が営まれたのか、またこれらの施設がどの程度の規模を持ち、いつごろまで機能していたか等不明な点は数多く残されており、それらの解明のための重要な手がかりを得ることができたものといえる。

注) 細川涼一「三 土御門天皇陵と金原御堂」『長岡市史』本文編一 第六章 第一節 1996年

第2章 走田古墳群第3次・海印寺跡第4次(7CKPME-4地区)調査概要

1 はじめに

- 1 本報告は、1997年12月15日から1998年1月23日まで、京都府長岡京市奥海印寺明神前31において実施した走田古墳群第3次調査および海印寺跡第4次調査に関するものである。調査の詳細は、図面類の整理、出土遺物の検討などを行ったのち来年度に報告する。
- 2 本調査は、海印寺跡に関係する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。調査は対象地に3カ所の調査区を設けて行った。調査総面積は約111m²であった。
- 3 発掘調査は、平成9年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センターの中島皆夫が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、寂照院住職である佐藤俊順氏をはじめ、近隣の方々に種々のご協力を賜った。
- 5 本報告の執筆・編集は中島が行った。

2 調査経過

調査地は阪急長岡天神駅の西方約1.5km、寂照院の敷地内で本堂の南東に位置している。周辺には田畠や竹林などの緑地がかなり残っているが、近年の宅地化によって景観は変わりつつある。



第6図 発掘調査地位置図 (1/5000)

6 検出遺構

周辺は丘陵地から南東方向へ延びる尾根筋の先端部にあたり、地形的には高位段丘に分類される^(註1)。調査地は標高64~67mほどの南斜面に立地しているが、竹藪の開墾や土取りなどによって、本来の地形は大幅に改変されているものと予想された。

調査地が所在する寂照院は、平安時代前期に創建されたと伝える海印寺の子院といわれるが、現在では仁王門など江戸時代末期以降の建造物を残すにすぎない。海印寺に関連する考古学的な調査は、これまで3次にわたって行われている。このうち、第2次調査では13世紀から14世紀前半の井戸、土坑、落ち込み状遺構や溝などを検出し、中世海印寺の一端を示す成果が得られた。^(註2)

第3次調査は寂照院の本堂新築工事とともに調査で、調査地は当地の北西部にあたる。ここでは海印寺に関連する成果は得られなかったが、江戸時代の座棺墓、走田8・9号墳と命名した古墳時代後期の横穴式石室2基、陶棺などを確認している。走田9号墳の横穴式石室は玄室の長さが約6mで、内部からは組合せ式家形石棺の底石と短側石が出土した。なお、寂照院の協力などにより、走田9号墳は石室部分の保存と展示公開が決定している。

調査地の北側には比較的平坦な部分があり、西側と南側には土壇状の高まりが存在していた。平坦部、土壇状部の性格を明らかにするため、正方形に近い第1区（約95m²）を北側の平坦部に設け、東西に長い第2区（約7m²）は西側の土壇状部中央に、第3区（約9m²）は南北に細長い調査区で南側の土壇状部に設定した。調査地は直前まで竹藪として利用されており、北側には高さ1m程度の崖面が形成されていた。調査は、まず重機によって表土、藪土、盛土を除去し、その後に人力による掘削を行った。

3 検出遺構

第1区 第1区は最も北に設定した調査区で、地表面の標高でいえば65.6~66.7mの範囲に位置している。調査区の北部では比較的だらかな傾斜の地山面が確認され、その上に表土、藪土が0.3~0.9mの厚さで堆積していた。しかし、南部には高さ0.4m程度の段差が東西方向に削り出されており、その部分から南は地表面下0.8~1.5mの深さまで掘削されている。地山面の上に堆積していたのが表土、盛土、藪土であることから、掘削は昭和期に行われたと考えられる。



第7図 調査直前の状況（南東から）



第8図 第1区全景（南東から）

第1区の北部では、時期不明の柱穴17基とともに横穴式石室を埋葬施設とする古墳を検出した。古墳は走田古墳群に含まれることが明らかであり、以下の記述では走田10号墳とする。

走田10号墳は、竹藪の開墾時に大規模な削平を受けており、墳丘は失われ横穴式石室も奥壁付近の基底石を残すにすぎない。しかし、遺存状態が比較的良好な奥壁周辺では床面に敷かれた拳大の礫を検出し、石室中軸線では幅0.4m前後で深さ約0.1mの排水溝を確認することができた。また、玄室の側壁に相当する部分では、石材の抜き取り跡も確認している。墳丘の状況をはじめ、石室の形態や構造の詳細は不明である。しかし、奥壁や排水溝、石材の抜き取り跡の位置から石室の大まかな規模を推定すれば、主軸の方位がN-15°-Wで、全長4.3m以上、奥壁部分での幅約1.5mという数値が得られる。

石室内の出土遺物は非常に少ないが、玄室の北西隅で古墳時代後期の須恵器壺と長岡京期から平安時代の土師器皿が出土している。

第2区 この調査区の層序は表土、盛土、藪土の順で、その状況は第1区の南部とほぼ同様である。土壇状部は盛土によって形成されていた。盛土下の藪土は昭和期より新しい時期のものであり、土壇状部は近年の土地改変にともなって築かれたことが明らかである。検出した地山面の高さは標高63.8~64.4mを測り、第1区の南部に比べて0.4~1mほど低い。地山面では溝状の落ち込み、土坑を検出したが、いずれも近年の開墾にともなうものである。

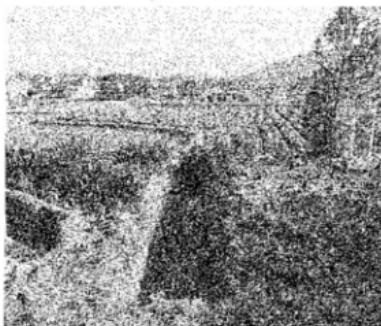
第3区 第3区の層序は表土、盛土、藪土の順で、土壇状部も盛土により形成されていた。土壇状部は第2区のものと同時期に築かれたと考えられる。標高が63.5m前後を測る地山面からは、時期不明の柱穴7基を確認している。



第9図 走田10号墳検出状況（南東から）



第10図 第2区全景（東から）



第11図 第3区全景（北から）

4 まとめ

本調査で出土した遺物は整理作業が終了しておらず、本報告では出土遺物の検討を行うことができない。出土遺物をはじめ、ふれることができなかつた内容は次年度に報告する。

本調査では当初の調査目的であった海印寺に関連する成果は得られなかつた。しかし、第1区では横穴式石室を埋葬施設とする走田10号墳を検出し、走田古墳群について新たな資料を加えることができた。以下、走田10号墳に関する若干の検討を行い、まとめに変えたい。

走田10号墳は8号墳から南東へ約50mの地点に位置する。横穴式石室の床面は標高が65.8m付近に推定され、その高さは8号墳の約69.5m、9号墳の70.6～70.8mに比べ3.7～5m低い。このことから10号墳と8号墳の間、調査地北側の竹藪などには、未発見の古墳が多数存在していると考えられる。とくに、調査地北側の竹藪には、巨石の露出地点が数カ所あり横穴式石室の存在が予想できる。横穴式石室の主軸はN15°Wで、8号墳のN 8°49' E、9号墳のN 5°21' Wに近い数値が得られない。古墳の位置関係を考慮すれば、主軸方位の相違は走田古墳群のなかでの支群の存在を示すものであろう。10号墳の横穴式石室は全長4.3m以上、玄室奥壁での幅が約1.5mを測る。8号墳は全長1.3m以上で奥壁の幅約1m、9号墳は全長5.2m以上、玄室の長さが約3m、奥壁の幅約1.8mであり、10号墳の石室規模が9号墳に近いことは明らかである。また、10号墳で検出した排水溝についても、石室規模と相關する要素として理解することができる。9号墳では組合せ式家形石棺の底石と短削石が出土している。石室の規模や排水溝の存在から、10号墳にも石棺が收められていた可能性を考慮しなければならない。しかし、石棺材および9号墳の石棺直下に認められた砂利は確認されず、現段階で石棺の存在を断定することはできない。この点については、走田古墳群における石室調査事例の増加を待って検討したい。これまでの調査成果より、10号墳は8・9号墳と異なる支群に属すること、9号墳に比べてやや規模が劣るもの有力者が葬られた古墳であることなどが推察される。

調査地は直前まで竹藪として利用されており、調査前の表面観察でも横穴式石室の検出地点周辺に石材などは露出していなかつた。このことは、状況によって竹藪でも横穴式石室の基底部などが残存することを示している。

注1) 日下雅義・植村善博「長岡市域地形分類図」「長岡市史」資料編一 1991年

2) 中尾秀正「海印寺跡第2次調査概要」「長岡市報告書」第32冊 1994年

3) 山本輝雄「走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査概要」「長岡市報告書」第36冊 1997年

第3章 浄土谷遺跡第1次調査概要

1 はじめに

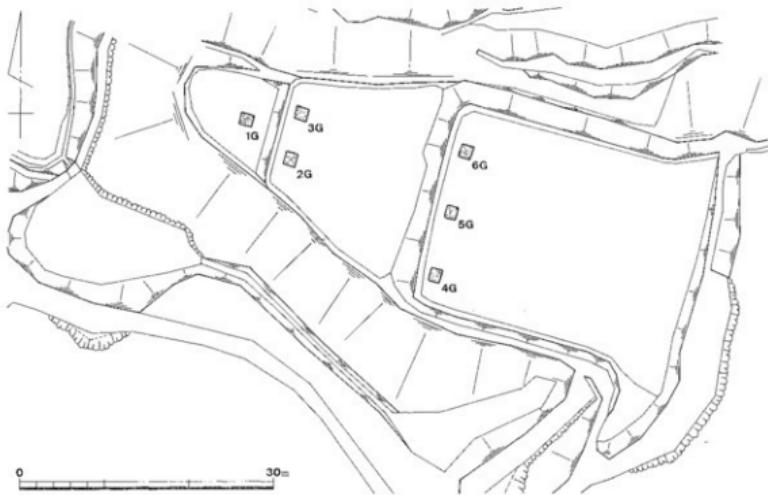
- 1 本報告は、1998年1月27日から1月29日まで、長岡京市浄土谷箱谷32、36他において実施したもので、調査面積は14m²である。
- 2 本調査は、浄土谷の地名や平安時代頃からの寺伝がある周辺寺院に関連する遺跡の有無を確認するため実施したものである。
- 3 調査は平成9年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センターの白川成明が担当した。
- 4 調査の実施については、土地所有者湯川シゲ氏の多大なご理解をいただいた。
- 5 地図等の作成は、技術補佐員池庄司淳の協力を得た。
- 6 本報告の執筆及び編集は白川が行った。

2 調査経過

調査地は西山山間部の丘陵地に位置し、海拔は約200mを測る。また、調査地南西方向200mに西山淨土宗に属する乗願寺があり、北西方向900mには同宗派の楊谷寺がある。



第12図 発掘調査地位置図 (1/20000)



第13図 調査地周辺図 (1/600)

調査対象地は、東から西に延びる舌状の尾根にあたり、三段の段差をもつ台形状を呈する。調査トレンチは、1.5m四方のグリッドを6ヶ所設けた。

1 Gは、尾根の最西端の最下段に設け、地表下約20cmまで掘削を行った。断面層位は耕作土、床土、茶褐色砂礫であった。遺構・遺物は、検出できなかった。

2 G・3 Gは、中段に南北に2ヶ所設けたものである。地表下約30~40cmまで掘削を行ったが遺構・遺物共に検出できなかった。断面層位は耕作土、床土、黄茶褐色砂質土である。

4 G・5 G・6 Gは、最上段に南北3ヶ所設けたものである。6 Gは、遺構・遺物共に検出できなかった。断面層位は耕作土、床土、黄茶灰褐色粘質土である。5 Gは、地表下約50cmまで掘削を行い、第3層目の茶褐色砂質土上面で須恵器の鉢（口縁部）が1点出土した。

また、4 Gでは、地表下約50cmまで掘削を行ったが、第3層目にあたる黄茶褐色粘質土から土師器3点が出土した。

今回の調査で出土遺物があつたことで、周辺に遺跡が存在するという大きな成果が得られた。



第14図 出土遺物 (1/2)



第15図 調査地全景（東から）

第4章 長岡京跡右京第566次（7ANKNZ-9地区）調査概要

——長岡京跡右京六条三坊一町、開田城ノ内遺跡——

1 はじめに

- 1 本報告は、1997年5月21日から7月2日まで、長岡京市天神一丁目34-1において実施した長岡京跡右京六条三坊一町および開田城ノ内遺跡の発掘調査に関するものである。調査面積は350m²である。
- 2 本調査は、駐車場造成に伴う事前調査として、隣接する右京第441次・同447次調査で検出した長岡京の鉄造炉遺構の範囲確認、および弥生時代から奈良時代にいたる開田城ノ内遺跡の資料を得ることを主な目的に実施した。
- 3 調査は、平成9年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、財團法人長岡京埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センターの原秀樹が担当した。
- 4 調査の実施に当たり、土地所有者の西小路行雄氏をはじめ、近隣の方々には種々のご協力とご理解を得た。なお、調査中に長岡京市立長岡第六小学校6年生による体験発掘を行った。
- 5 本報告の執筆および編集は原が行った。

2 調査経過

調査地は、阪急長岡天神駅の西約150mにあり、住宅と店舗が集中する駅西側の市街地に位置



第16図 発掘調査位置図 (1/5000)

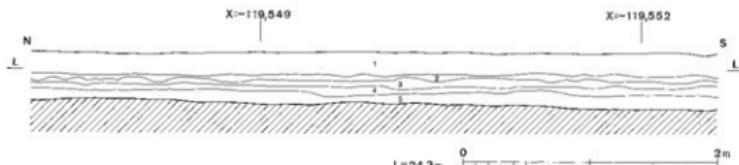


第17図 小学生の体験発掘

本地点の周辺は、北東の土壘上に高い樹木がそびえ立つ開田城跡があり、その北側の東西道路（愛称名アゼリア通り）は長岡京の五条大路を、これより一町分南の東西道路は同六条間北小路をそれぞれ踏襲した道となっている（巻頭図版2）。

周辺では、道路の拡幅やマンション、店舗等の建設に伴う発掘調査が多く実施されている。縄文時代では、当地から南へ約300mのところに十三遺跡がある。中期の船元式を出土した右京第344次調査、後期・晩期の深鉢を出土した右京第203次調査があり、地形から西方の段丘上に集落跡が想定されている。弥生時代では、右京第67次・同370次調査で後期の豪と堅穴住居が検出されている。古墳時代では、右京第90次調査で中期の方形周溝墓と土器棺墓、同370次調査で後期の堅穴住居などが検出されている。奈良時代では、右京第119次・同370次調査で3×3間の総柱建物が計3棟検出されており、付近に大規模な倉庫群の存在が明らかとなった。周辺での主な調査成果については付表2のとおりである。

なお、5月29日には長岡市立長岡第六小学校6年生による体験発掘を実施した（第17図）。



第18図 調査地東壁土層図（1/40）

する。調査は、まず重機で耕作土等の除去を行い、順次手作業による精査を開始した。

本地点は、低位段丘面をおおう扇状地の前面に形成された緩扇状地に立地しており、標高は24.6mである。かつて西方の段丘面には谷をせき止めたため池が点在したが、近年の開発により現在はその大半が消滅した。当地の西にある八条ヶ池は、寛永15（1638）年に灌漑用水の確保のために整備されたもので、その名は当時開田村と長岡天満宮を家領とした八条宮家に由来する。⁽³⁾ 八条ヶ池から流れ出る西小路川、西城ノ内川、開田川などの小河川は、部分的に道路や歩道下の暗渠を通って大川に合流するが、その経路の一部は長岡京の条坊や条里地割と合致している。なお、当地の旧小字である西小路の南には、十一・十三といった条里地名が残る。

付表2 開田地域の主な調査成果一覧 (●印…遺構 ○印…遺物)

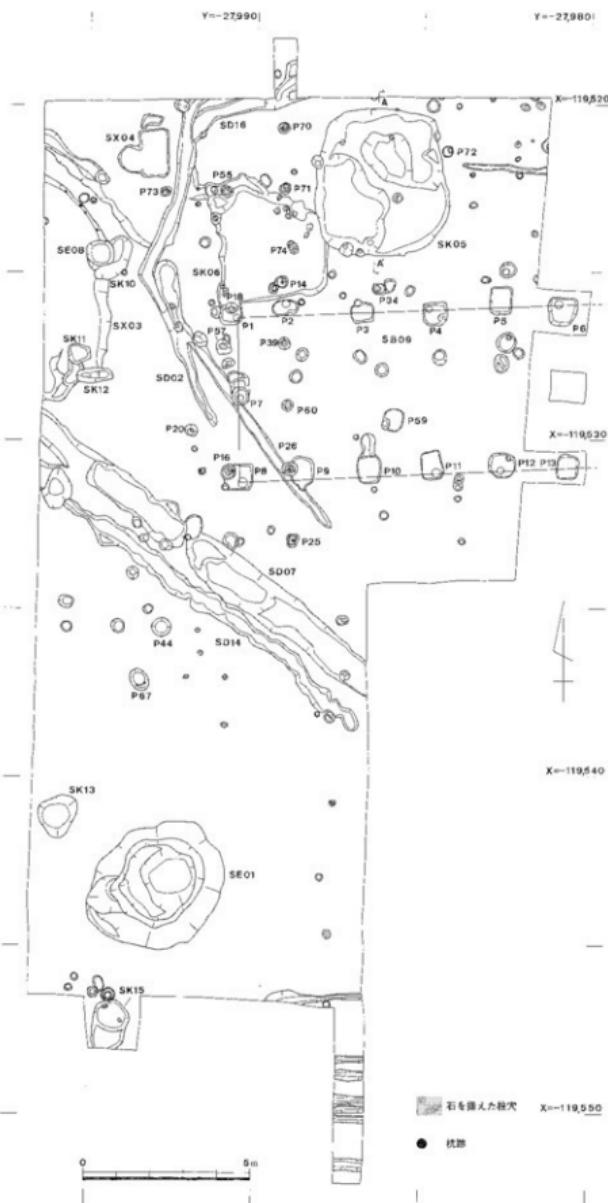
旧小字名	地区名	次数(右京域)	立地	旧石器	縄文	弥生	古墳	鶴・鉢	長岡京	平安	中世	近世	平安～中世の主な事項
和泉殿	K I D	36	緩肩状地										平安前期の大型掘立柱建物
		268	開析谷		○	●○		○		○	○		
		427	緩肩状地	●○	●○	●○		●○	●○	○		●○	平安時代初めの漁群
		11	緩肩状地		○	●○		○					
内閣本	K U T	23	緩肩状地							●○			平安末の土堤墓2基
		96	緩肩状地		●○		●○						
		302	緩肩状地			●○		●○					西一坊跡西小路から平安時代の遺物
		203	泥炭層Ⅱ	○						○			
十三	K J S	577	泥炭層Ⅱ										
		17	緩肩状地										開田城主郭内の調査
		67	緩肩状地										
		404	緩肩状地		○				○	●○	●○		鎌倉時代の柱穴と溝
城ノ内	K S C	443	緩肩状地			○	○	●○		○	●○		鎌倉時代の土坑と柱穴群
		526	緩肩状地							●○			開田城東面に新たな掘立土塁を確認
		528	緩肩状地	○	○	●○	●○	○	○	○			
		344	泥炭層Ⅰ	○	○	○		●○	○				六条条間高小路から富寿神寶34枚出土
当電田	K T N	90	緩肩状地	○	●○	●○	●○	●○	●○	○			
		103	緩肩状地										
		379	緩肩状地	○	●○			●○		●○			鎌倉時代の土坑群
		460	開析谷	●○	○	●○	●○	●○		○	●○		
西小路	K N Z	109	緩肩状地			○	●○						
		411	緩肩状地							●○	●○		鎌倉時代の井戸
		439	緩肩状地	●○		●○	●○	●○	●○	●○	●○		平安時代前期の井戸
		440	開析～緩肩	○		●○	○	●○	●○	●○	●○		鎌倉時代の土堤墓、柱穴群
西陣町	K N C	441	緩肩状地	○	○	●○	●○	●○	●○				
		447	緩肩状地										
		474	緩肩状地										
		498	緩肩状地	○		●○		●○	●○	●○	●○		鎌倉時代の土塙墓
西御本	K N T	566	緩肩状地										鎌倉時代の井戸、柱穴群
		130	船形の副溝										平安時代後期の火葬場、鎌倉時代の火葬土塙
		38	緩肩状地										
		194	緩肩状地										
		475	後背低地			○		●○					
		515	後背低地			○		●○		○			
		565	後背低地										

3 検出遺構

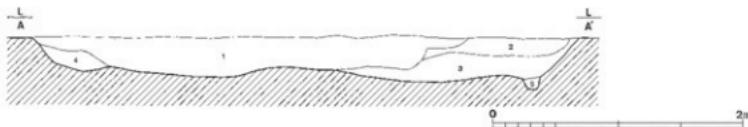
本調査地では、遺構はすべて地山面から検出した。地山は北から南へ緩やかに傾斜しており、北側は部分的に小窪を含む黄褐色系の粘質土となっている。また、調査地南半部では約0.2mの厚さの客土（第5層）があり、地山面の傾斜をなくす地業が行われたことがわかる。この層に遺物は含まれていなかった（第18図）。

今回の調査で検出した主な遺構は、長岡京期の掘立柱建物1棟、鎌倉時代から室町時代にかけての井戸2基、土坑3基、石を据えた柱穴のほか、近世の土坑と溝がある。このうち中世の建物については、柱筋の不一致や必要な部分の柱穴を欠くところから、建物の平面形態について明確にできなかった。長岡京期の建物は柱穴の深さが10cm未溝と極端に浅くなってしまっており、後世に削平を受けたと考えられる。調査区南端では、六条条間北小路の有無を確認するために南ヘトレンチを抜けた（第19図）。

14 檢出遺構



第19図 検出構造図 (1/150)



第20図 土坑 SK05断面図 (1/40)

近世の遺構

土坑と溝がある。時期決定できる遺物が少なく、古い遺物の混入の方が多い。埋土の違いと切り合い関係を主に判断した。

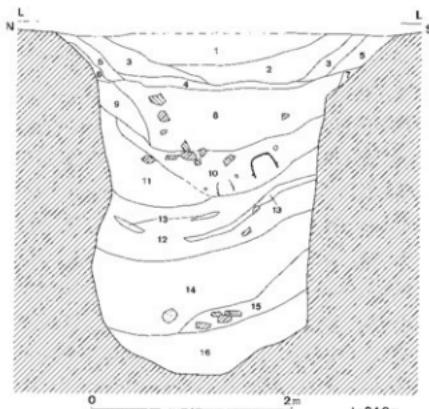
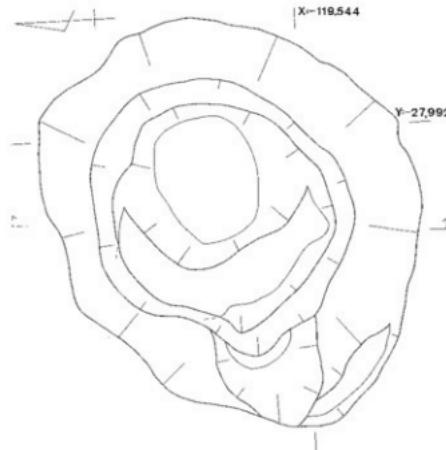
溝 SD02 調査地北壁から、くの字状に折れる幅0.3~0.5mの溝で、二股に分かれたあと終息する。砥石が出土している。

落ち込み SX03 調査区西壁にかかる深さ約0.1mの浅い凹み。北西から南東方向に直線的に延びており、肩口付近には4本の杭跡が残る。この落ち込みを掘り下げた地山面から、井戸などの遺構を確認している。

落ち込み SX04 SX03と平行する間は、馬の背状に高くなる。P74は掘り下げた地山面で検出した。

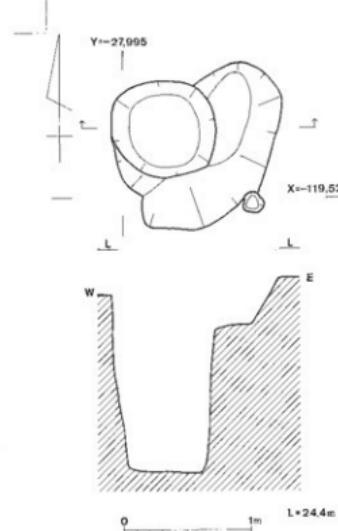
土坑 SK05 一辺4.4m×4m、深さ約0.3mのいびつな長方形土坑。掘形は肩口から緩やかに傾斜しており、南端には石がまとめて投棄される（第20図、図版7-5）。丹波焼鉢、唐津焼碗に混じって古墳時代中期の土師器、須恵器、中世の土師器、瓦器の小片が出土した。

溝 SD07・14 調査区中央部を、北西から南東方向に延びる溝。両溝は幅や深さに違いはあるが、方位と埋土が類似することから一連の溝と考えてい



1. 黄褐色土・埴入瓦柄土 (ぼっけい)
2. 黄褐色土・底入瓦柄色粘質土
3. 黄褐色粘質土
4. 黄褐色砂質土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土・底入瓦柄質土
7. 墓室粘質土
8. 墓室粘質土
9. 綠灰色ブロック裏の灰白色シルト
10. 綠灰色腐泥質土
11. (赤褐・灰白・羽根模様含む、薄茶多い) 青い粒々が盛る
12. 綠灰色シルト (灰・褐色斑点が少い)
13. 綠灰色シルトブロック
14. 綠灰色シルト裏の暗茶色シルト (灰温り)
15. 綠灰色シルト裏の暗茶色シルト
16. 綠灰色砂質土 (灰茶色シルト)

第21図 井戸 SE01実測図 (1/50)



第22図 井戸 SE08実測図(1/40)

の北側に建物や土坑が確認できるものの、井戸近辺は遺構が希薄である。

遺物は、検出当初から多量に出土しており、特に掘形の周縁部には長さ30cm前後の石が集中し、中には火を受けて赤く変色したリスグリーフが着いた石もある（図版6-1）。土器や木製品の大半は木片や葉っぱ、昆虫の羽根、種などの有機物、獸骨などを含む第10層に集中しており、廃絶時にまとめて投棄されたと考えられる（図版7-2～4）。これより下層は遺物が少ない。本井戸は、これまで検出した中世井戸の掘形の中では右京第356次調査の今里城跡の井戸 SE08（直径4m）に匹敵する規模であり、多彩な遺物が出土した点でも注目される。

井戸 SE08 調査地北西部で検出した小型の井戸。直径約0.8mの円形で、深さ1.4m。井戸棒は残っておらず本来の構造は不明だが、壁面中ほどに帯状の凹みが巡っており、その下方には鉄分が染み込んでできた斑紋が明瞭に残る。壁面に板材の痕跡は残らないが、これらは木棒の存在を示す状況証拠になるとを考えている（図版6-4）。井戸を覆う屋形などの柱穴は見当たらないが、東側で見つかっている建物柱穴は関連する施設となる可能性がある。遺物は、壁面に帯状の凹みが巡るあたりに小さな石が集まっており、この中から土師器皿と瓦器碗の完形品が出土した（図版6-3）。本遺構と重なる土坑SK10は、井戸に切られているが時期については不明。このような小さい掘形の井戸は珍しい。

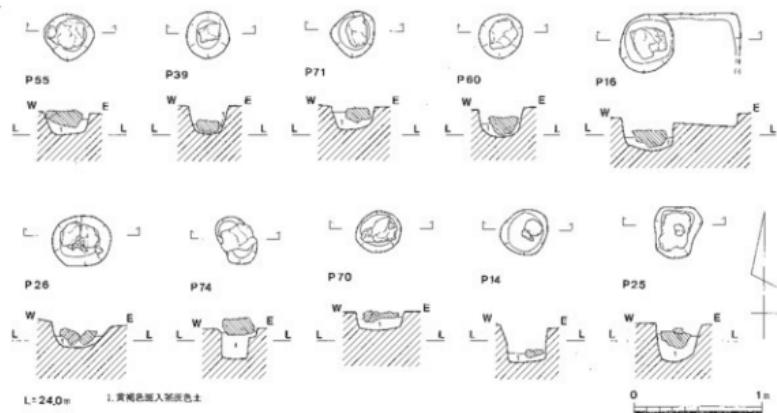
土坑 SK06 一辺約3×3.8m、深さ0.1mで、一方が張り出した不整形の土坑。北東隅には人頭大の石が転がる。内部に石を据えた柱穴は、掘り下げた地山面から検出した。土師器、瓦器の小片が出土した。

土坑 SK12 長さ1.1m、幅0.4m、深さ約0.3m。南東隅から完形の土師器皿が出土した。

る。溝幅は両方で約2mあり、SD07は部分的に約0.3m深くなる。遺物は出土しなかった。

中世の遺構

井戸 SE01（第21図） 調査地南部で検出した大型の井戸。掘形の平面形は、長辺4.4m、短辺3.5mの長円形で、深さ3.4m。断面形は、開口部がわずかに漏斗状に開いており底部には凹凸がみられる。井戸は粘質土下の砂礫層を掘り下げており、底付近の壁は水にえぐられて部分的に崩れる。底付近の壁面は還元された状況を呈する。掘形内には木枠や石組、曲物等の施設は残されていないが、掘削時に縦方向の木枠の痕跡が粘土面に転写され残っていたことから当初は木製の井戸枠が設けられていたことがわかる。その痕跡から井戸は板材を縦に並べた多角形ではないかと考えている。また、周辺では井戸を覆う屋形や釣瓶と滑車を保持する柱穴等は確認できなかった。調査地内では井戸



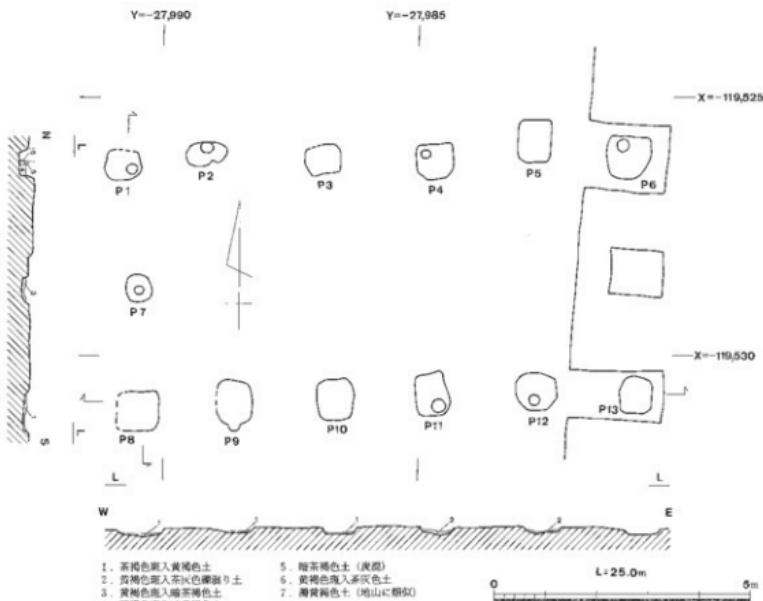
第23図 石を据えた柱穴実測図 (1/40)

土坑 SK15 挖形の一部が調査区外へ続くが、長辺1.4m以上、幅1m、深さ約0.2mの長円形土坑。井戸 SE01と同じく人頭大の石が出土している。土師器、瓦器の小片が出土した。

柱穴内に石を据えたピット群 調査地北半部から合計16箇所確認した。柱穴は直径0.3~0.4mの円形または不整円形。石は平らな面を上にして柱穴内に据えており、2個並ぶもの（P26）もある。石は柱穴の底に置くものと、底から浮いた状態に置くものがあり、わずかに高低差がつく。柱穴内に石を据える理由は明らかでないが、地盤が軟弱なところに置かれたものでないことから、長さが不ぞろいな柱を整える必要から行われた可能性を考えたい。石は適当な河原石を用いており、加工したものは見当たらない。これらの柱穴から建物を復元するのは難しいが、柱筋が直線的にそろうものは、南北方向のP14~P39~P60~P26~P25の4間分で、柱間寸法はP14~P26が1.8m等間、P26とP25は2.1mである。また、南北方向のP70とP71、東西方向のP71~P55~P73の3間分はL字形に折れており、柱間寸法はそれぞれ1.8m等間である。この他の柱穴は、石の有無に関係なく柱筋が不一致であったり柱間寸法が不均等であったりすることから、建物の復元は難しい。土坑SK06内に転がる石は、柱穴内に据えられた石と類似する。隣接する右京第443次調査でも同様の柱穴が多数見つかっており、これらは中世集落の建物が集中する状況を反映したものと考えられる。

長岡京期の遺構

掘立柱建物 SB09 右京六条三坊一町内の本地点では、掘立柱建物SB09を検出しただけである（第24図）。SB09は、2×5間以上の東西棟で、さらに東の調査地外へ続く。柱間寸法は、柱痕跡が不明瞭なことから明確でないが、梁行2.4m等間、桁行2m等間と推定される。挖形は一辺0.7~0.9mの隅円方形で、深さは約0.1mと浅い。柱穴の中には削平を受けていびつに小さくなつたものもある。建物が北で西へ2°振ることについては、遺構の残り具合がよくない点も考慮する必要があろう。土師器と須恵器の小片が出土した。



第24図 挖立柱建物 SB09実測図 (1/100)

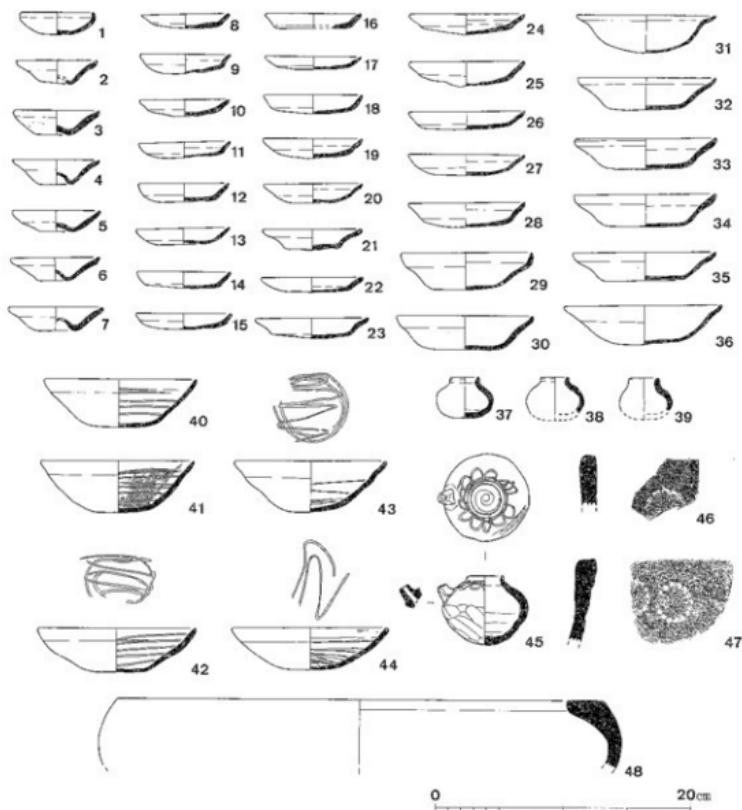
4 出土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、大部分が中世の井戸 SE01から出土したものである。整理コンテナにして約24箱分あり、そのうちの半分は木製品が占める。中世以外では、平安時代・長岡京期・古墳時代・弥生時代・縄文時代の遺物が少量出土した。井戸 SE01からは、土師器・須恵器・瓦器・国産陶磁器と、青白磁・白磁・青磁・緑釉陶器などの輸入陶磁器のほか、木製品・石製品・金属製品・獸骨・種子などが出土している。

1 土器、陶磁器

井戸 SE01出土土器

土師器（第25図 1～36、図版 8・9） 皿は法量の違いから口径6.1cm、器高1.7cmのもの（1）、口径6.4～7.5cm、器高1.7～1.9cmのもの（2～7）、口径6.9～8.0cm、器高1.1～1.6cmのもの（8～22）、口径8.8～9.2cm、器高1.5～1.9cmのもの（23～28）、口径10.3～12.4cm、器高2.1～3.0cmのもの（29～36）がある。1は、口縁端部を尖り気味につまみ上げる。精良な胎土で、灰白色を呈する。いわゆるコースター形の終えん段階と考えられる。本地域では類例が乏しい。2～7は、いわゆる底部中央を押し上げたヘソ皿。内面は時計回りにナデ上げる。精良な胎土で、黄白色を呈する。これらの皿は破損しているが、器表面はナデと指圧痕が明瞭に残り、使用時の汚れも少ない。本地域ではヘソ皿そのものが出土することが少なく、その中で今回井戸か



第25図 井戸 SE01出土土器実測図1 (1/4)

ら多くのヘソ皿が出土したことは独特な外形と相まって際立つ点である。7は、底部に直径3mmの孔を焼成後にあけている(図版12)。口縁部半分を欠失するが、スヌなどは付着しない。このように皿の底部に円孔をあけた事例は、広島県福山市の草戸千軒町遺跡や、滋賀県大津市の比叡山横川にある豊山遺跡に報告例があり、中でも草戸千軒町遺跡では孔に軸が残っていた。民俗例では、葬送時に墓地へ行く道々に孔をあけた皿に細い竹などを軸にしてローソクを灯す「ローソク」と呼ばれる習俗が知られている。⁽¹²⁾ 2は、底部を押し上げた部分だけ欠失しており、もしかすると穿孔に失敗した皿かもしれない。8~22は、口縁部を外反させる。口縁部のナデ調整は不均等で、一個体の中でもナデの強い部分は外反して底部との境が明瞭となるが、弱い部分については外反せずそのまま丸く取まる。このタイプの皿の大半は歪んでいる。調整は、内面にハケメが残るものが多い。外面はオサエのみ。11・12・16・17は、口縁部に油煙が付着する灯明皿。13は、底部に板状圧痕がつく(第40図4)。底部内面を強くナデしており、押された内面が凹み、これに

対応する外面には縦縞状の模様がプリントされる。これは、焼成前の乾燥台となっていた物の圧痕が強くナデ押した部分にうつったものと考えられており、器壁の薄い部分は欠けて穴があいている。19は、器表面全体が刃物でついたように細かく剝離しており凸凹する。21は、平らな底部とわずかに屈曲する口縁部からなり、見込みに幅約2mmの匂線を巡らせている。同タイプの皿については形態、胎土、色調とも異色で他に類例を知らない。胎土には他の皿に多く見られる赤色粒子を含まず、色調も暗灰白色を呈する。21を除く皿の胎土は、微砂粒と赤色粒子を含んでおり、色調は灰白色～橙灰色を呈する。23～28は、口縁部を外反させるタイプで底部との境が明瞭。形態は8～22と変わらないが、わずかに法量が大きくなる。口縁部の垂みは前者ほどではなく、おおむね同等、均質な形となっている。調整手法は、内面にハケメを残すものがあり、底部はオサエ。24は、口縁端部から底部内外面にかけて油が染みた状態の変色部分がある。端部にススが付着したり、灯心が燃えた跡は残らないが灯明皿と考えられる。また、26は口縁端部の先端にススが付着する。25は、底部に板状圧痕がつく（第40図5）。圧痕の範囲は幅4cm、長さ約3cmで、底部の半分以上を占める。底部の器壁が薄い部分は欠けている。29～36は、平らな底部と屈曲する口縁部をもつ皿で、この中では最も法量が大きい。調整は、他の皿と同じくナデとオサエによる。内面にハケメを残すものがあり、胎土に赤色粒子を含む。29・34は、口縁部に油煙が付く灯明皿。

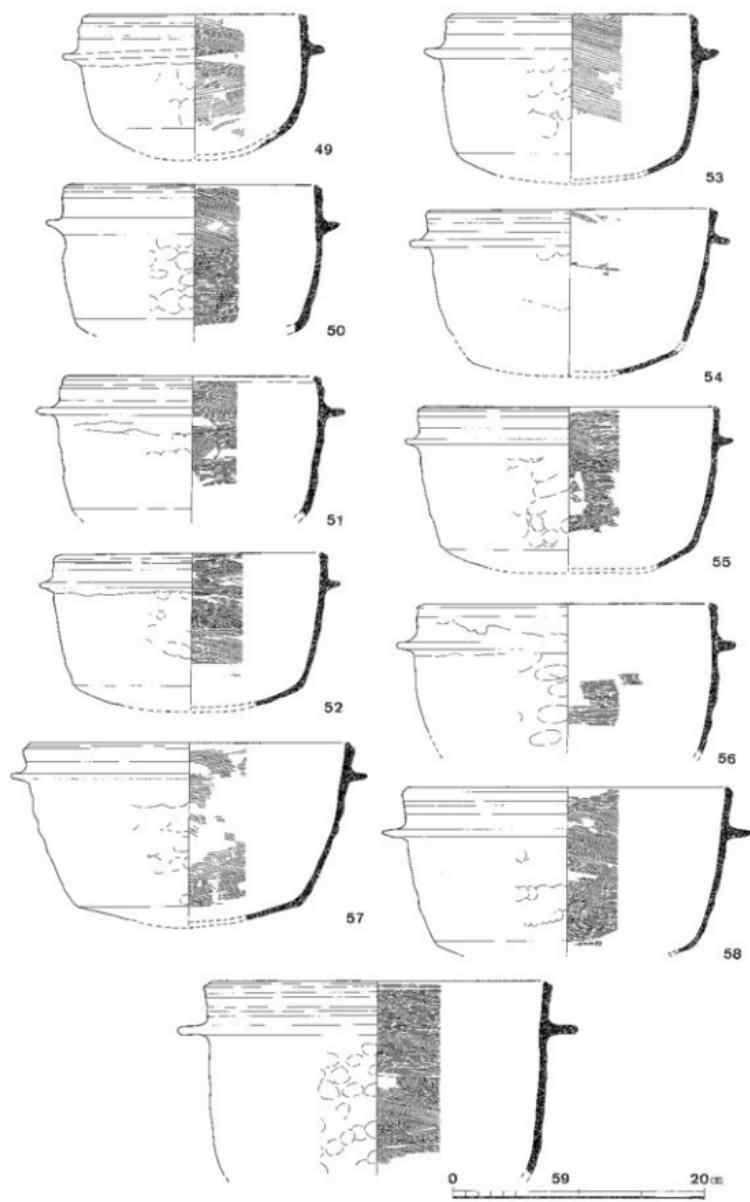
瓦器（第25図37～48、第26・27図、図版8・10・11） 小型壺・椀・水注・羽釜・鍋・火鉢などがある。

小型壺（37～39） 短く直立する口縁部と丸く膨らむ体部からなる。口径2.0～2.2cm、器高は37が3.2cm。このうち、37・38は炭素が吸着した黒色を呈するが、39は灰白色。胎土も、前者は微砂粒をわずかに含む程度であるが、39は比較的多くの砂粒を含む。

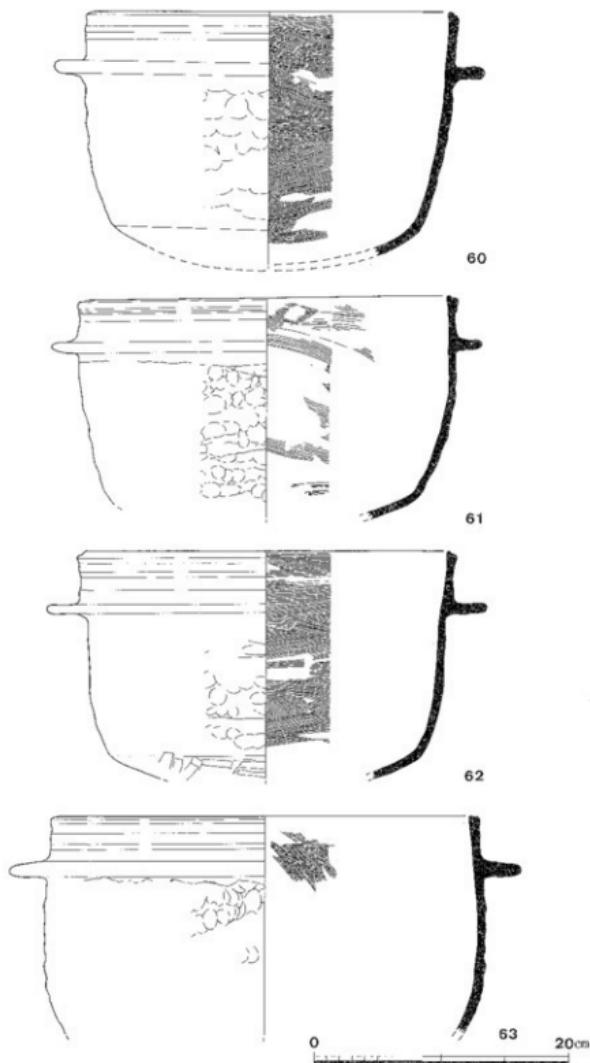
椀（40～44） 口径12.0～12.5cm、器高3.2～4.0cm。小さく平らな底部と直線的にのびる口縁部からなる。高台は付いておらず、粘土を擦り付けた痕跡も見られない。体部内面の暗文は、まばらで約10本以下。見込みは、粗い鋸歯状暗文を施す。これらの椀は、法量や形態、調整手法に大きな差はないが、色調は40・43・44が銀灰色、41は全面が炭素未吸着の灰白色で、42・43は重ね焼きによるとみられる円弧状の炭素未吸着部分がある。42については、胎土に砂粒を多く含んでおり、当地で出土する大多数の椀の中では異質な胎土である。42以外は内面にハケメが残る。

水注（45） 口径2.7cm、器高5.4cm、胴径6.7cm。短く直立する口縁部と、底部がやや尖り気味の卵形の体部からなり、体部最大径付近に長さ1cmの注口を付ける。口縁部の周りに花弁を図案化した文様をヘラ描きする。調整は、体部を斜め方向のナデと指オサエ、口縁部は横ナデとする。把手もなく底部が不安定な形だが、古瀬戸の水注を模したものであろうか。

火鉢（46・47・48） 46・47は、外面に菊花のスタンプ文を押印する小片。46は、外面が銀灰色で口縁頂部と内面はいぶされずに灰白色。内外面ともヘラミガキを施す。菊花文は半分欠失するが12弁に復元できる。二等辺三角形の花弁を円形に連ねており、スタンプ文は直径約3.2cm。47は、かなり摩滅しており調整不明。口縁部には火を受けて赤変する部分がある。菊花の中心部



第26図 井戸 SE01出土土器実測図 2 (1/4)



第27図 井戸 SE01出土土器実測図 3 (1/4)

分は不鮮明だが、点を円形に連ねた16弁の花弁が左右に2個分残る。スタンプ文は直径約3.2cm。口縁部の曲線からみて輪花形の可能性がある。これらの菊花文を押印する火鉢は大和產と考えられている。⁶⁰ 48は、口径38cm。水平に張り出した平たんな口縁部と球形の体部からなる。外面は丁寧なミガキを施しており、鏡面のように平滑。色調は外面が漆黒色。内面は銀灰色。

羽釜（49～63） 図化した15点のほかに未実測の小片が多数ある。口径は16.9～33.9cmまであるが、最も多いのは25cm前後である。大型の羽釜には口径40cm代のものや、鋸から口縁部まで6cmをはかるものがある。形態は、直立する口縁部の周りに鋸を張り付けている。口縁端部は外傾する面をもつものが多い。底部は断面U字状に真ん中が下がる。調整は、口縁部外面に沈線状の浅い段を1～2条巡らせており、内面はハケメ調整。鋸から下には厚くススが付着しているため調整は明瞭でないが、体部外面は指オサエ、底部はヘラケズリを行う。ススは鋸下面から体部外面に多く付着し、火熱を直接受ける底部中央にススは少ない。三足の付く羽釜は非常に少なく2点確認ただけである。このうち1点は、残存長10cmの小型品。

中世陶器と輸入陶磁器（第28図、図版10） 古瀬戸の灰釉平碗・花瓶・おろし皿、鉄釉の天目碗と、青白磁の蓋のほか、白磁碗、青磁碗・皿、緑釉陶器の小片などがある。

灰釉平碗（64） 口径12.6cm、器高4.0cm。体部は偏平で、直線的に開く。削り出し高台で、内面を浅く削り込む。高台縁には糸切り痕が残る。高台周辺を除いて灰釉が施されており、内面には重ね焼きのトチン跡が2ヶ所残る。

灰釉花瓶（66） 底径4.5cm、胴径4.6cm、残存器高6.7cm。ロクロ水びき成形で、底部糸切り。底部には同じ底径で厚さ2mmの薄い板状の粘土塊が重なって溶着している。底部を除く器表面全体に施釉する。口縁部は欠失するが、割れた胴部を補修した跡が明瞭に残る。おそらく漆で接合したものであろう。

灰釉おろし皿（67） 平行に線彫りした直線と直線の間を刺突して凸凹のおろし目をつくる。底部糸切りで、体部外面に施釉する。

鉄釉天目碗（65） 口径12.0cmの小片で高台を欠く。高台付近を除き全面施釉。口縁端部は直立気味に外反する。二次的な火熱を受けて釉が溶けており器表面はザラザラする。

青白磁蓋（68） 環状の鋸がついた蓋で、中央に動物と思われる飾りを付ける。口径5.6cm、残存器高2.6cm。内面は露胎で、外面全体は淡青色。水注や瓶の蓋と考えられる（巻頭図版3）。

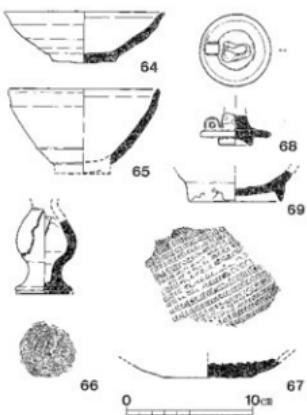
青磁碗（69） 高台径9.6cm。疊付を除く全面に施釉する。

土坑 SK06出土土器（第29図）

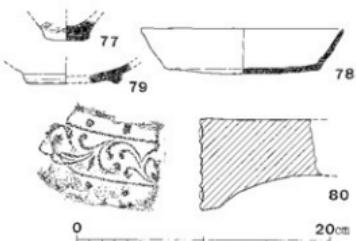
土師器皿（70・71）、瓦器椀（72・73） がある。70は、口径11.2cm、器高2.1cm。口縁部は屈曲して開く。71は、口径13.2cm、器高2.1cm。平らな底部と短く直線的に開く口縁部からなる。72は、口径13cm、器高4.7cm。内外面とも摩滅する。高台は断面三角形。73は、口径13.9cm、器高6.3cm。高台の張り付けは粗雑で偏平にひしゃげる。全体に摩滅している。

井戸 SE08出土土器（第29図、図版10）

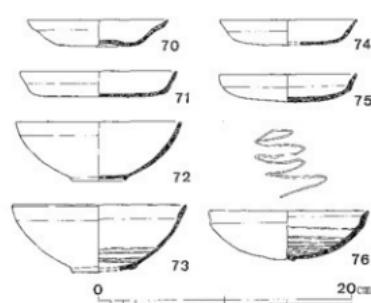
土師器皿（74・75）、瓦器椀（76） がある。74は、口径11cm、器高2cm。75は、口径10.8cm、



第28図 井戸 SE01出土陶磁器実測図 (1/4)



第29図 土坑 SK06・井戸 SE08出土土器実測図 (1/4)



第30図 その他の出土遺物実測図 (1/4)

器高2.2cm。口縁部は、ナデの強弱で外反度が違っている。76は、口径12.6cm、器高3.9cm。口縁端部のナデは強く、明確な稜線ができる。小さな平底の片寄った位置に、半円形に2~3回粘土紐を擦り付けた痕跡がある。体部内面の暗文は10本未満で、見込みに鋸歯状暗文を施す。外面には円弧状に炭素未吸着部分が残る。

掘立柱建物 SB09出土土器

P11の柱根痕跡から須恵器壺(78)が出土した。口径16cm、器高3.6cm。

その他の遺物

混入遺物として、弥生時代後期の甕(77)、平安時代前期の綠釉陶器碗(79)、平城宮式6732Q型式の軒平瓦(80)などがある。77は、外面にタタキメが残る底部小片。かなり摩滅する。79は、削り出し高台。内面に円弧状の重ね焼き痕跡が付く。高台内を除いて全面に施釉する。軒平瓦は他に小片が1点ある。瓦は、小片ばかりであるが平瓦を中心とし30点余り出土している。

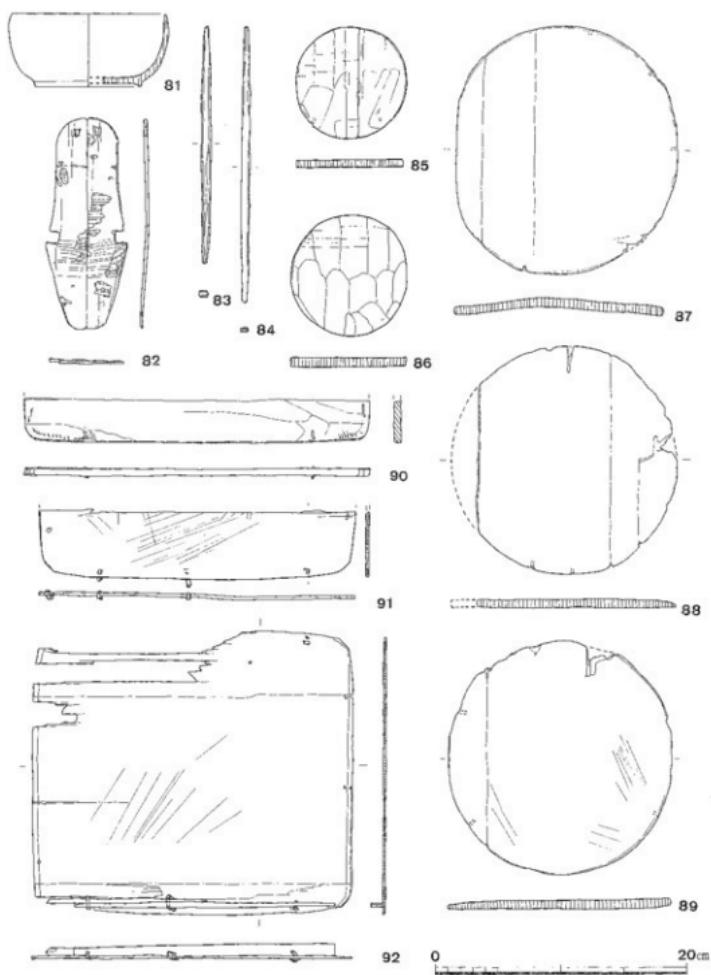
2 木製品

井戸 SE01出土木製品 (第31~35図、図版12~14)

第10層を主体に多彩な木製品が多く出土した。主なものには、漆器椀、箸、折敷、曲物の底板、柄杓、草履、祓、杖、羽子板、塔婆、木鍤、しゃもじ、自在鉤、横樋、たも、杭、網籠断片、柿渋を塗った細長い板材などがある。この他、加工した木片が多数出土したがその用途・形態については不明。

漆器椀(81) 口径12.4cm、器高5.8cm。全面に黒漆を塗り、見込みと外面に赤漆で草花の文様を描く(巻頭図版3)。他に別個体の小片がある。

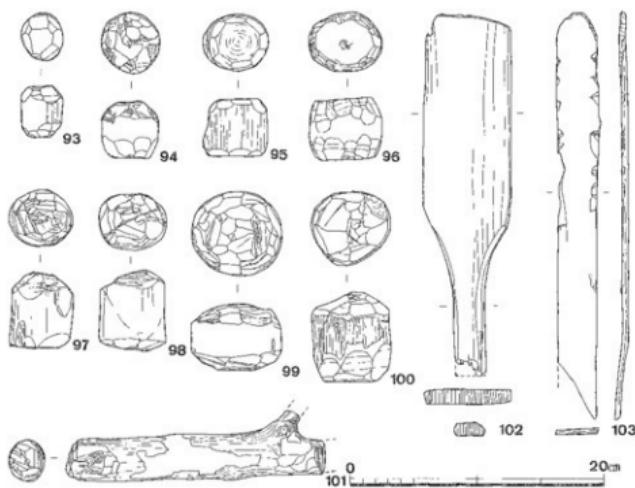
箸(83・84) 木片を棒状に粗削りしたもので、両端は先を細くする。長さは、83が長さ18.6



第31図 井戸 SE01出土木製品実測図 1 (1/4)

cm、84が 21.6cm 。

折敷 (90~92) 全形のわかるものは92のみ。底板の大きさは長辺25.5cm、短辺22.1cm、厚さ0.2cm。底板は短辺が直線、長辺は緩やかな曲線となっており、四隅を隅切りする。四方には高さ1cmの直立する側板を内側に立てており、2~3ヶ所の結合孔に棒皮紐を通して留める。外れた側板の圧痕が残る。90は、長さ27.3cm、厚さ0.6cmの小片。91は、長さ25.2cm、厚さ0.3cmの小片で、それぞれ結合穴と棒皮紐が残る。



第32図 井戸 SE01出土木製品実測図2 (1/4)

円形曲物の底板 (87~89) 径18~20cm、厚さ約0.7cm。側面に釘穴がある。

柄杓の柄 (111)、側板 (110) と、底板 (85・86) 柄杓は底板が抜けた状態で出土した(図版7-4)。柄は、長さ42.7cm以上の断面方形の棒。幅2.6cm、厚さ1.4cm。柄は側板の上から下へ斜めに差し込み、側板と柄の接合部分には柄の片側に木釘で留めた跡がある。柄の先端はわずかに突き抜ける。側板は桟皮紐が外れてゆるんでいる。高さ9.0cm。底板は、85が径8.8cm、厚さ0.6cm。86は、径9.5cm、厚さ0.7cm。85の側面には釘穴がある。

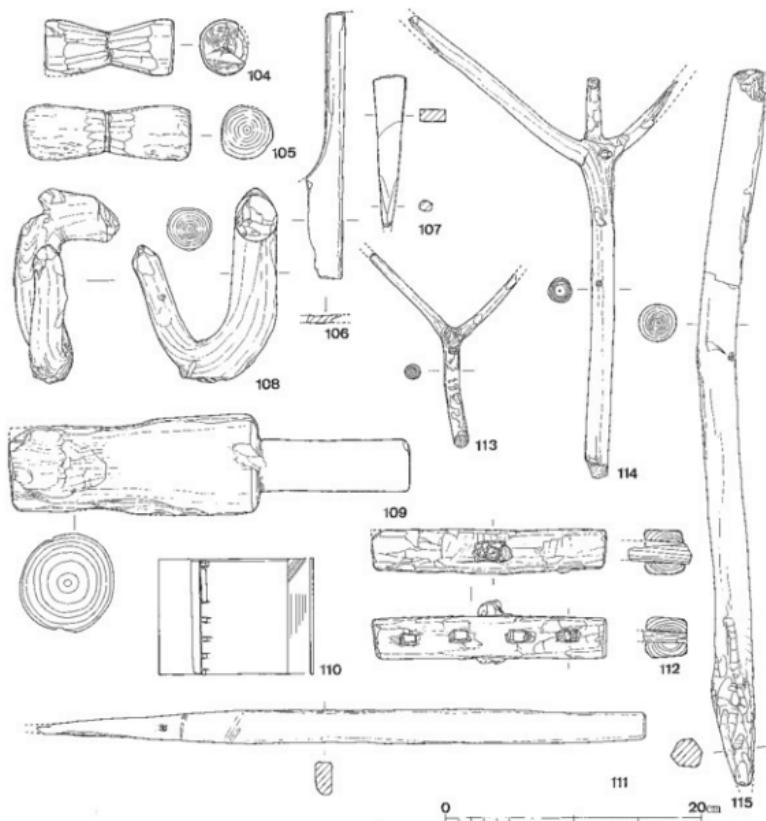
草履 (82) 長さ16.7cm、幅6.5cm、厚さ約0.3cm。板草履、板金剛と呼ばれる履物で、左右対称形の薄い板に藁などを巻き、鼻緒をつけたもの。つま先部分に2カ所の穴をあけており、藁がわずかに残る。片足分が出土した。草戸千軒町遺跡や鎌倉市街の調査で多く出土している。⁽¹⁰⁾

毬 (93~100)、毬杖 (101) 毬は、円筒形の材の両端を粗く削り落としたいびつな形。径は約3.8~7.0cmまであり、高さ4~7cm。芯持材。これ以外にも、欠損した小片や両端を削り落とす前の未成品と考えられるものがある。毬杖は、長さ20.5cm、径3.5cm。木の両端を切断した一方に斜めに延びる枝がつく。枝は折れており、付根部分の径は約1.2cm。表皮が残る芯持材。

羽子板 (102) 長さ28.3cm、幅7.0cm、厚さ1.2cm。長方形板材の両端を削いで柄をつくりだしている。彩色や文様はない。羽子は見当たらなかった。

塔婆 (103) 長さ31.7cm、幅3.5cm、厚さ0.5cm。上端を丸く削り、表面に左右対称の切り込みを4カ所入れる。下端は切断される。文字や記号などは確認できなかった。

木錐 (104・105) 切断した木片の頭を削り輪鼓形にしたつちのこ。105は、中央を一段凹めて紐をかけやすくする。104は、長さ10.2cm、幅4.9cm、厚さ3.8cm。105は、長さ13.0cm、幅4.3cm、厚さ4.0cm。全体に摩耗する。芯持材。



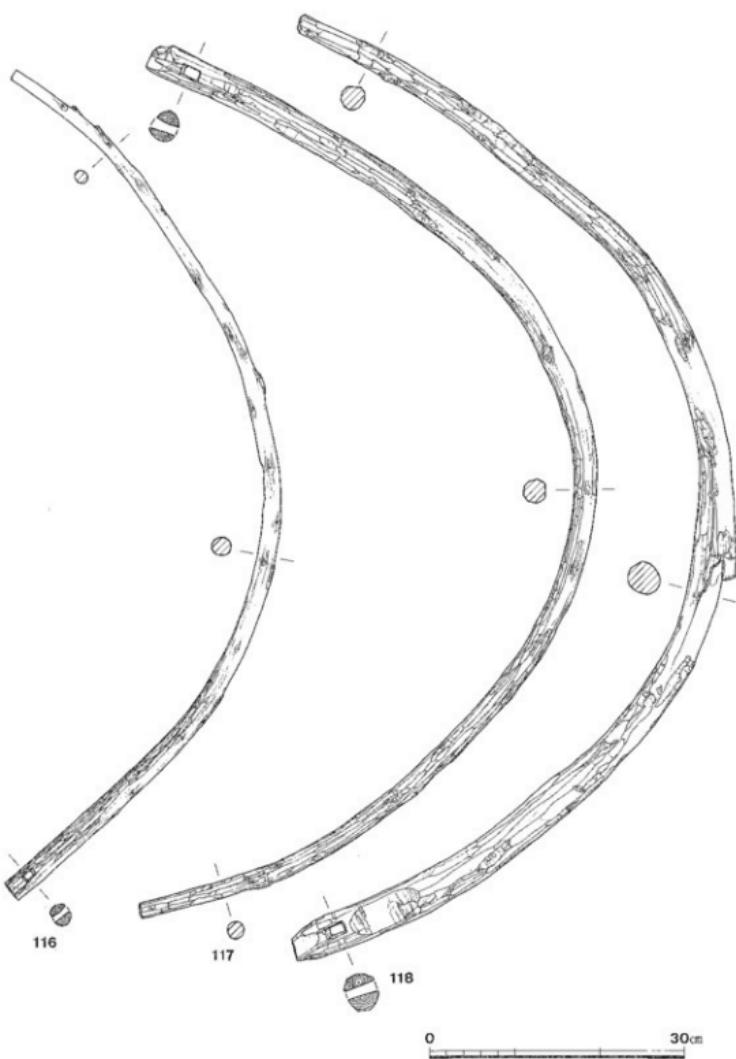
第33図 井戸 SE01出土木製品実測図 3 (1/4)

しゃもじ (106) 縦に割れており、先端を欠く。長さ15.6cm、幅3cm以上、厚さ0.7cm。

自在鉤 (108) 曲げやすい木の幹を加工している。本体をつるす部分は鉤の手に曲げ、外側に切り込みを入れる。本体はJの字状に屈曲しており、先端を尖らせる。屈曲する下方には切断痕があり、曲がった部分を活かすため太い幹側を取り去っている。部分的に表皮が残る。

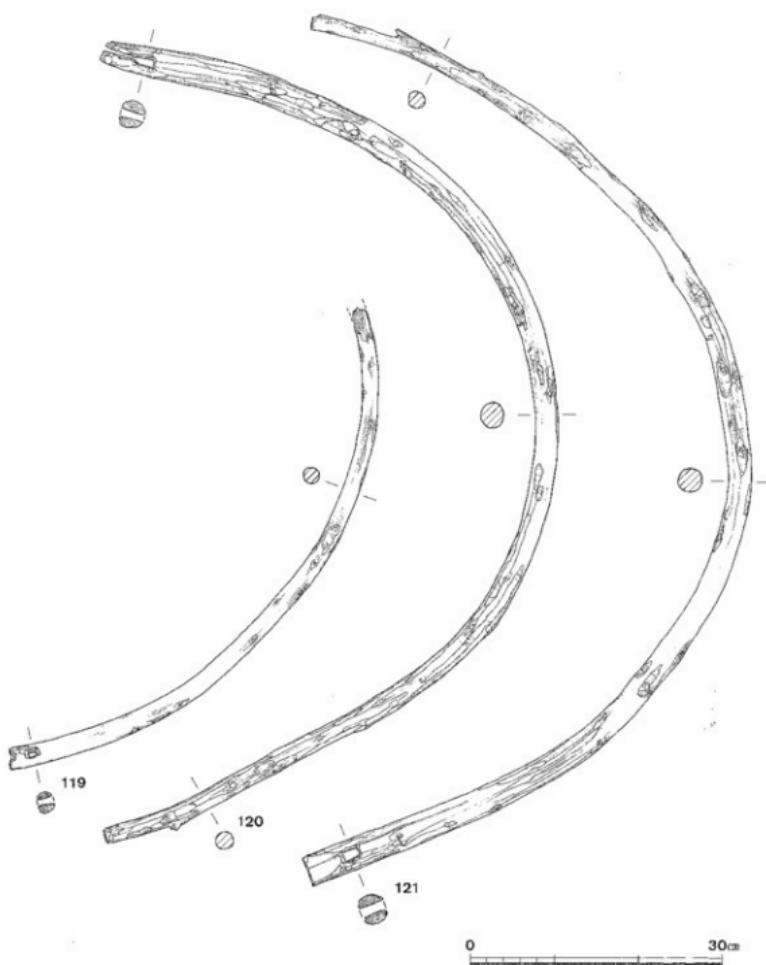
横槌 (109) 長さ31.6cm、身径7.8cm、柄径4cm。身は使いこなしており凹む。

たも (113・114、116~121) 二股に分かれた丸木を利用した小型品 (113・114) と、弓形に湾曲する材を用いた大型品 (116~121) がある。小型品は、二股の枝を輪状にして網をはつたもので、細長い柄がつくすくい網。113は、付根から延びる枝を切り取るが、114は付根に約5cmの突起を残す。柄は半分切り込みを入れた後で折るが、輪状の枝は直接折っている。113は長さ15.2cm。柄の径約1.1cm。114は長さ36.1cm。柄の径1.8cm。部分的に表皮が残る。大型品は、弓状に曲がる材の一方に長方形の穴をあけている。118は真ん中で折れしており、119は端を失す。



第34図 井戸 SE01出土木製品実測図 4 (1/6)

大きさはほぼ似通っており、両端を結ぶ長さは95~110cm、径は穿孔部側が太く、もう一方に向かって細くなる。材は直に切断しており、太い側の端を斜めに切り落としたり埋ませている。他の類例については乏しいが、右京第356次調査の井戸 SE08出土品に類似したものがある。本書では、形態から漁労具のたもとしたが、その使用法については不明なところもあり今後検討を要する。

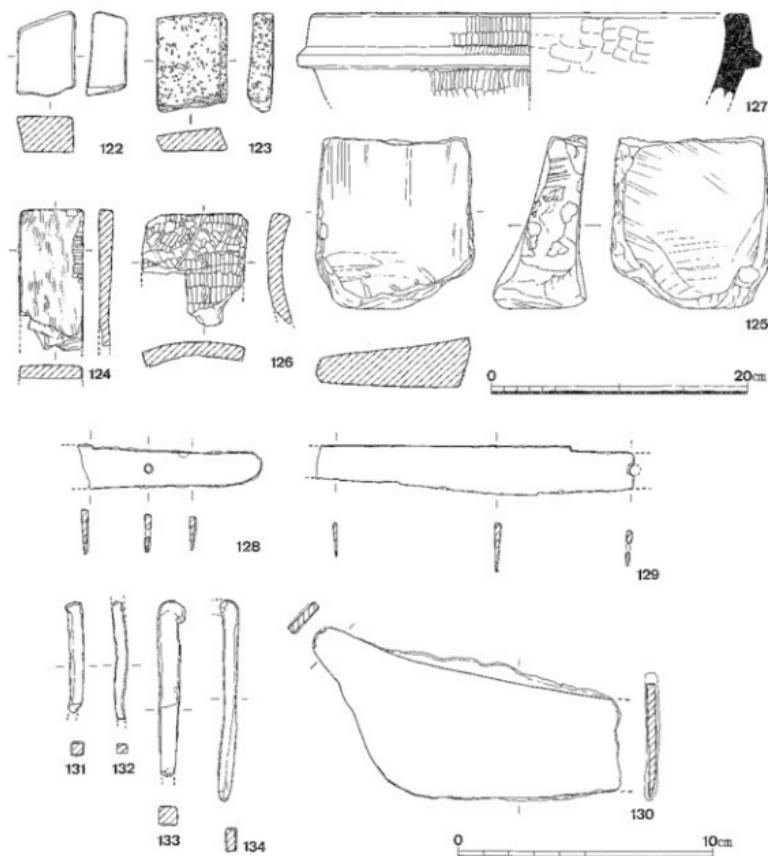


第35図 井戸 SE01出土木製品実測図 5 (1/6)

板材 (107) 棒状の一端を細く加工したもので、先端部分は丸く摩耗する。厚さ0.9cm、現存長9.7cm。栓に転用したものかもしれない。

用途不明品 (112) 長さ18.2cm、一辺3.5cmの角材に約1cm四方の穴をあけており、このうちの一つに差し込んだ木片が残る。この穴と面違いの直交する方向には、柄と考えられる約1.5cm角の木片が残る。

杭 (115) 現存長55.7cm。径3cm。細長い棒の先端を削って尖らせており、頭部を欠失する。



第37図 井戸 SE01出土鉄製品実測図 (1/2)

このほか二股になった径約14cmの丸太材も出土している。

3 石製品 (第36図、図版15)

縄文時代の叩石、中世の砥石、滑石製石鍋、石臼のほか、加工痕のある凝灰岩質泥岩、白色粉状に風化した結晶質石灰岩（大理石）などが出土している。特に井戸 SE01には大量の石が投棄されており、ススが付着するものも多數含まれていた。122は、平面長方形の砥石で4面使用しており、片方を欠失する。砂岩製。123は、表面に気泡が多く見られる。平面長方形の砥石で4面使用。ススが付着し、両端を欠失する。花崗岩質アブライト製。124は、層理にそってはがれており、使用面の裏側を欠失する。珪質頁岩・粘板岩製。125はかなり使い込んだ大型品。砂岩製。126は、滑石製石鍋を転用した温石片。三方に調整面がある。127は、滑石製石鍋。口径33.4

cmに復元できる大型品で、器壁も約2cmと厚い。内外面と割れ口にススが付着する。136~140は、砂岩製の砥石。138にはススが付着する。141は、石臼片。裏面にノミの痕が残る。142は、厚さ8cm、現存長11cm。わずかに円弧を描いており、凸面は砥石に使用する。転用品と考えられるが、本来の形態や用途は不明。これと同じ石材は、右京第513次調査でも出土している。⁽¹⁷⁾ 135は、混入品の叩石。半分欠失する。

4 鉄製品（第37図、図版16）

刀子と鉈、釘が出土している。刀子（128・129）は、茎に目釘穴がある。128は、茎の長さ6.7cm。棟区をもつ。129は、茎と刃の両端を欠失しており、全体に反る。棟区をもつ。鉈（130）は、下方に刃をもち棟は角張る。厚さ0.6cm。細くなる部分に柄が着くと考えられる。刃の先端は折れてない。釘（131~134）は、断面四角形の角釘で頭部を折り曲げる。134は、全長7.9cm。

5 獣骨（図版16）

井戸SE01から出土した。鹿の角（143）の他に小さな角が1本ある。144~153は、詳細について未鑑定。

5 ま と め

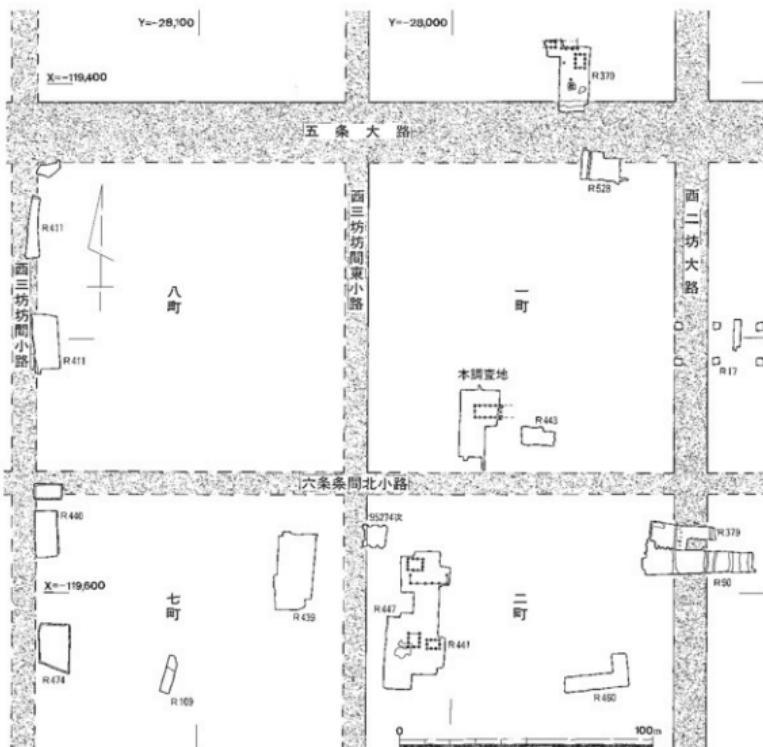
（1）長岡京廃都から平安時代の土地利用について

今回の調査は右京六条三坊一町内では3回目となる。同町内ではこれまで東隣の右京第443次調査で、柵列か掘立柱建物の一部と推定される柱穴を検出しているが小面積のため確認することができなかった。また、右京第528次調査では古墳時代から奈良時代の遺構を確認したが、長岡京の遺構はなかった。これは同町内の東半分に室町時代の開田城と先行する中世集落が営まれたこと、西小路川が条坊と重なること、さらには近世の新田開発で削平された事情も考えられる。

一方、六条条間北小路より南の二町内では鋳造炉遺構が発見され注目を集めましたが、ここでは中近世の遺構密度が本町内と比べて希薄になっており、この違いも長岡京の遺構の残存状況に差をもたらした一因と考えられる。

しかし、開田地域で最も注目されるのは、条里地割と条里地名、条坊地割が混在することであり、現在の田畠や河川の経路が長岡京の条坊跡と条里跡を踏襲するように通る箇所が存在する点である。特に本調査地周辺では、東西方向の五条大路、六条条間北小路、六条条間小路がほぼ現在の道路と重なっており、南北道路では西二坊間西小路と西二坊間小路がある。また、開田三尊寺の四周を流れる西小路川は、小路と小路で四方を囲まれた長岡京の右京六条二坊九町域に沿って流れる（第39図）。このように、旧小字西小路、城ノ内、当竜田、内開本、東羅、外内といった東西に長い範囲は、以前から条坊地割が卓越したところとして注目されていた。

一方、市街地における発掘調査が増加したことで、新たな遺跡の状況が徐々に明らかになりつつある。平安時代前期の遺物と遺構が確認された主な事例について見てみると、長岡京の井戸最上層に投棄された一括資料、六条条間南小路から出土した24枚の富寿神寶、西寺と同范の軒平瓦や西賀茂瓦窯産の軒平瓦の出土、土器一括資料と錢貨、漆製品などが出土した精巧な構造をもつ



第38図 周辺調査地位置図 (1/2000)

⁽⁴⁾ 井戸、柱根が残る大型掘立柱建物、⁽⁵⁾ 五条大路の路面上に立つ建物などがある。これらは廃都から⁽⁶⁾ 断絶することなく土地利用が行われたことを物語る資料であるが、それぞれの遺跡の性格を決定づけるまでには至っていない。

これまでに指摘される見解は、条坊地割が良好に残存することから『日本後紀』に記された王臣・貴族に班給した上位階級の宅地説がある。このほか、室町時代に成立した『仁和寺諸院家記』には仁和寺の院家として開田院が記されており、宇多法皇の御所があったといわれる。開田院に関する古代の史料は明らかでないが、鎌倉時代初頭には後鳥羽上皇が二度にわたって開田院に行幸したことが『明月記』などにあり、相応の伽藍を構えた堂舎が建ち並んでいたと考えられる。⁽²⁷⁾ 小字西小路内で行われた右京第411次・439次・498次の各調査では、鎌倉時代前期の播磨産の軒瓦などとともに特異な小型瓦が出土しており、付近に関連施設が想定される。また、当地の西方段丘上に営まれた西陣町遺跡の火葬塚は上級貴族や皇族に用いられる葬法であり、門跡・高僧の住む施設を構えた開田院との関連でその立地が理解できる。さかのぼって、開田一帯で確認される9世紀後半から10世紀前半にかけての遺跡は、昌泰2(899)年に落飾した宇多法皇が承平元(931)



第39図 開田地域の旧地形と条坊復原 (1/5000)

年に没するまでの時期に相当しており、今後の調査で開田院創建に結び付く資料が明らかになる可能性がある。

また、これに関して注目したいのは離宮伝承地の和泉殿跡である。江戸時代の地誌『山州名跡志』巻之十に「官家の別荘アリ」と記載されているが実態は不明。ここは現在も付近の農業用水の水源地となっており、和泉社とよばれる稻荷社がたっている。開田院との関連はわからないものの、寺院（仏堂）と離宮、別業（住房）が近接して存在したことを物語るものかもしれない。その当否はさておき、開田一帯における平安時代の遺跡の評価については、仁和寺遠所別院としての開田院の位置は重要である。江戸時代の地誌『山城名勝志』巻第六には開田三尊寺が開田院を改めた寺院としている。

中世の開田莊は、久我源氏中院家から九条家に移り道家の第五子である開田准后法助の所領となり、建長3（1251）年に仁和寺領となった。

(2)開田の中世集落跡

本地点では、鎌倉時代から南北朝期にかけての井戸や土坑、柱穴を検出した。東隣の右京第443次調査でも多数の柱穴を検出しており、一連の遺構と考えられる。戦国期の城である開田城でも同時期の遺構・遺物が見つかっているが築城時に壊されたものも多いと考えられる。未報告のため詳細は不明。周辺では、当地の西方右京第411次・同440次・同474次・同498次調査で、本地点と変わらない時期の井戸、建物、土壙墓を検出している。また、南東では右京第379次調査

で鎌倉時代前期の墓壙と想定されるもの、同23次調査では土壙墓を検出している。東では、右京第442次調査で本地点と同じ時期の土坑を検出している。北では、右京第204次調査で鎌倉時代の土壙墓を検出している。三尊寺周辺の調査はほとんどのが、西小路川に囲まれた部分は環濠集落として紹介されている。こうして概観すると、鎌倉時代から南北朝期にかけての遺構は、旧小字西小路の西方、本地点から開田城にかけてと、三尊寺周辺にはほぼ集約される。開田の中世集落の消長を探るうえでそれぞれ重要な地点であるが、建物の多寡を比較するうえで柱穴の有る無しと多い少ないは遺構の粗密を知る手掛かりになる。こうして比べると、当地と東隣の調査地は柱穴が特に多いのがわかる。

これに関連して、八条宮家が元和九（1623）年に開田村と開田天満宮を家領とするにあたり、天満宮を現在の境内に移したと言われる。元の社地は、本地点の南東部分と考えられている。開田天満宮は開田村の産土神として元々は城ノ内に祭られて在地領主・土豪を中心としたといわれる。開田城内の中世前期の遺構は、これらの土豪の館と集落を物語るものであろう。いずれにしても、三尊寺周辺を含めて主要な部分の解明が進み資料が増加した時点で改めて検討する必要がある。

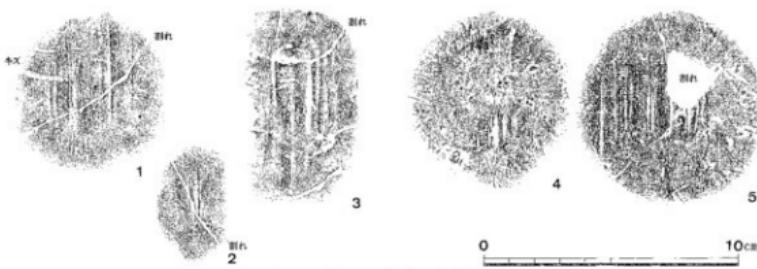
（3）井戸 SE01出土遺物の内容

今回出土した遺物は、土師器皿と瓦器羽釜を中心に東播系の捏鉢と甕、備前焼の甕、常滑焼小片、古瀬戸の灰釉碗と花瓶、鉄釉碗、輸入陶磁器などである。破片数については付表3のとおりで、破片を数えるにあたっては、大きさが約5mm以下のものは除外した。

調査段階から特に目を引いたのは瓦器羽釜が多い点と砂岩製を中心とする砾石が多い点である。しかもほとんどの羽釜にはススが付着しており、中には黒い固体物が張り付いた状態で出土したものもあった。一様に底が抜けている点も共通している。各器種の割合は、瓦器が全体の半数以

付表3 井戸SE01の遺物破片数量

器種	器形	破片数	比率 %
土師器	皿	583	96.8 36.9
	不明	19	3.2
	小計	602	100.0
瓦 瓢	碗・皿	249	26.3
	刷・垂	686	72.4
	甕	4	0.4 58.1
	火鉢	9	0.9
須恵器	不明	0	0.0
	小計	948	100.0
	甕	12	20.7
	鉢	46	79.3 3.6
国 產	不明	0	0.0
	小計	58	100.0
	碗・皿	3	50.0
施釉	甕	2	40.0 0.3
	その他	0	0.0
陶 器	小計	5	100.0
	甕	9	60.0
	不明	6	40.0 0.9
	小計	15	100.0
輸 入	碗	0	0.0
	不明	1	100.0 0.1
	小計	1	100.0
青 磁	碗・皿	2	100.0
	不明	0	0.0
	小計	2	100.0
磁 器	青白磁 甕	1	100.0 0.1
	その他 不明	1	100.0 0.1
合 計			1633 100.0



第40図 土師器皿の板状圧痕拓影 (1/2)

上を占めており、次いで土師器皿となる。その他は極端に少ないので本井戸の特徴であろう。これらの遺物は、14世紀前半を中心とする時期に比定される。

(4) 土師器皿の板状圧痕について（第40図）

井戸 SE01出土資料から3点確認したが、その割合は土師器皿の終破片数の1%に満たない。⁽⁴¹⁾ 同種の皿については、右京第385次調査の土器埋納坑 SX38507（2・3）と溝 SD38503、同480次調査の SD48003（1）、同442次調査の土坑 SK23などでも出土しているが、いずれもその割合は低い。今回、他の出土品を含めた底部の拓影を5点掲載した。

板状圧痕は、底部の小さな範囲に部分的に残っており、凹凸の幅や深さの違いから明瞭な拓影がでないものもある。しかし、キズや割れ目は圧痕自体が平行する筋であることから比較的容易に識別できる。板状圧痕は、内面を削るように強いナデを加えた部分の裏側にプリントされる。これは焼成前の乾燥段階にできたヒビを補修した跡と推測されており、その一因として底部器壁の薄手化が指摘される。⁽⁴²⁾ 伝統的に手づくねによる土器作りを行う京都都市域の新たな動向が、乙訓地域にも波及した一面がこの板状圧痕から見て取れる。

- 注1) 小田桐淳「右京第441次調査略報」『長岡京市センター年報』平成5年度 1995年
- 2) 小田桐淳「右京第447次調査概要」『長岡京市報告書』第32冊 1994年
- 3) 永井規男「長岡天満宮」「長岡京市史」建築・美術編 長岡京市史編さん委員会 平成6年
- 4) 小田桐淳「右京第344次調査概要」『長岡京市センター年報』平成元年度 1991年
- 5) 木村泰彦「右京第203次調査概要」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年
- 6) 長岡京跡発掘調査研究所調査
- 7) 山本輝雄・木村泰彦「右京第370次調査略報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年
- 8) 岩崎誠「右京第90次調査概要」『長岡京市報告書』第9冊 1982年
- 9) 中尾秀正・続伸一郎「右京第119次調査概要」『長岡京市報告書』第13冊 1984年
- 10) 原秀樹「右京第356次調査略報」『長岡京市センター年報』平成2年度 1992年
- 11) 大上裕士「草戸千軒町遺跡出土の穿孔土器」「草戸千軒」150号 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1985年
- 12) 兼康保明「ロウソクの考古学」「考古学推理帖」大巧社 1996年
- 13) 小森俊寛・植村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 14) 立石堅志「(1)奈良火鉢」「概説中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 真陽社 1995年
- 15) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ」 1995年
- 16) 奈良国立文化財研究所史料第27冊「木器集成図録」近畿古代篇 昭和60年
福島県立博物館展示図録『いにしえの木の匠』 1996年
- 17) 原秀樹「右京第513次調査概報」『長岡京市センター年報』平成7年度 1997年
- 18) 中島信夫「右京第443次調査概要」『長岡京市報告書』第32冊 1994年
- 19) 岩崎誠「右京第528次調査概要」『長岡京市報告書』第36冊 1997年
岩崎誠「右京第528次調査概報」『長岡京市センター年報』平成8年度 1998年
- 20) 原秀樹「右京第389次調査概報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年

- 21) 注4に同じ
- 22) 花村潔「第95274次立会調査概報」『長岡市センターレポート』平成7年度 1997年
- 23) 原秀樹「右京第439次調査概報」『長岡市センターレポート』平成5年度 1995年
- 24) 中島皆夫「右京第529次調査概報」『長岡市センターレポート』平成8年度 1998年
- 25) 長岡京跡発掘調査研究所調査(右京第36次調査)
- 26) 山本輝雄「右京第554次調査概報」『長岡市センターレポート』平成8年度 1998年
- 27) 細川涼一「第6章第1節—真言宗寺院の展開」『長岡市史』本文編—長岡市史編さん委員会 平成8年
- 28) 石尾政信「右京第411次調査概要」『京都府センター概報』第58冊 1994年
- 29) 注23に同じ
- 30) 引原茂治・奈良康正「右京第498次調査概要」『京都府センター概報』第70冊 1996年
- 31) 木村泰彦「右京第130次調査概要」『長岡市センターレポート』第2集 1985年
- 32) 注28に同じ
- 33) 石尾政信「右京第440次調査概要」『京都府センター概報』第58冊 1994年
- 34) 野島永「右京第474次調査概要」『京都府センター概報』第66冊 1995年
- 35) 注30に同じ
- 36) 岩崎誠・中島皆夫「右京第379次調査・第91132次立会調査概報」『長岡市センターレポート』平成3年度 1993年
- 37) 長岡京跡発掘調査研究所調査
- 38) 木村泰彦「右京第442次調査概報」『長岡市センターレポート』平成5年度 1995年
- 39) 岩崎誠「右京第204次調査略報」『長岡市センターレポート』昭和60年度 1987年
- 40) 木下良「西畠地方における城館と防衛集落」『京都社会史研究』1971年
- 41) 木村泰彦・中島皆夫「右京第385次調査概要」『長岡市報告書』第29冊 1992年
原秀樹「右京第479次調査概要」『長岡市報告書』第33冊 1995年
- 42) 山本輝雄「右京第480次調査概報」『長岡市センターレポート』平成6年度 1996年
- 43) 注13に同じ

第5章 長岡京跡右京第582次（7ANISF-1地区）調査概要

——長岡京跡右京三条二坊十三町・今里車塚古墳・今里遺跡——

1 はじめに

- 1 本報告は、1997年10月27日から12月26日まで、京都府長岡京市今里庄ノ渓32において実施した約110m²の発掘調査に関するものである。
- 2 本調査は、宅地開発とともになう事前調査として、地下破壊の恐れが少ない駐車場予定位置、約110m²の調査区として行った。当調査の目的は、長岡京期の宅地利用状況を探るとともに、今里車塚古墳外堤線を具体的に捉えることや、今里遺跡に関する資料をえることとした。
- 3 調査は、平成9年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、財團法人長岡市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター岩崎誠が担当した。なお、地下破壊の恐れが濃厚な建物建築位置は、原因者負担として、約128.5m²の調査を行ったので、原因者負担調査区を第1トレンチ、国庫補助調査区を第2トレンチと呼ぶことにした。
- 4 当調査は、土地所有者の能勢明氏の文化財保護に対する深いご理解とご協力があり、なしえたものである。
- 5 本報告の執筆及び編集は岩崎誠が行ったが、発掘調査から本報告作成までには多くの方々の協力があった。



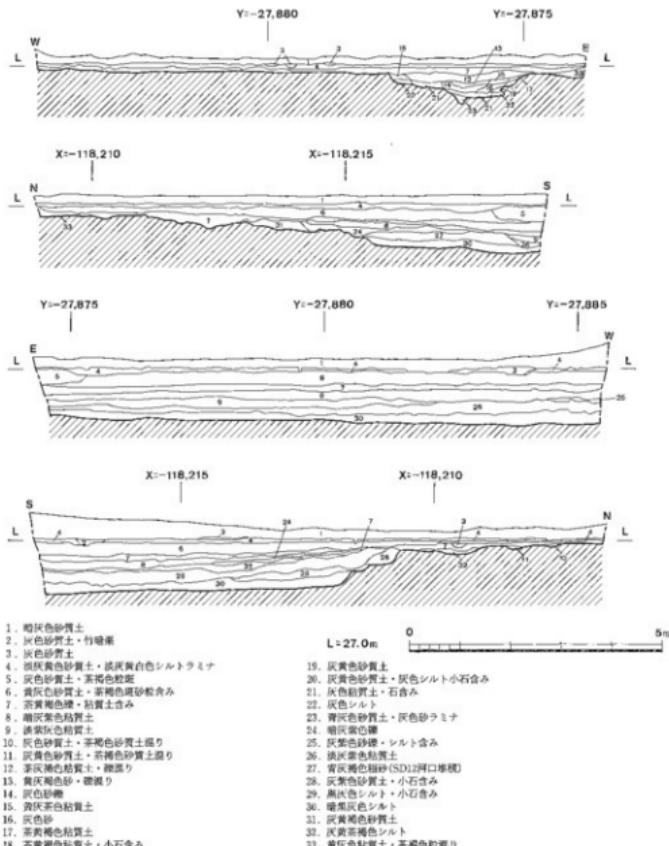
第41図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

調査地は、阪急長岡天神駅の北約1400mの位置にあり、府道67西京高槻線（外環状線）を通過する阪急バスの今里停留所東隣地である。地形は西から東に傾斜し、氾濫原Ⅰに立地する。調査前は、標高約27.3mの水平面に耕作された水田地であった。

当調査は、今里車塚古墳の外堤位置と形状を明らかにするとともに、長岡京期の段階に、周濠部分がどのような状況であったのか、また今里遺跡に関する遺構などの遺存状況について調査し、遺跡保護をはかる目的で実施した。

調査は、先立って開始した第1トレンチの北側に149.5m²の調査面積を計画したが、残土置き場の都合上約110m²の調査となった。



第42図 第2トレンチ土層図 (1/100)

3 検出遺構

当調査では、現地表面をなす水田耕作土と中・近世包含層（第42図1・2層）を重機で除去し、以下を調査対象とした。その結果、中世以後の遺構群、平安時代の遺構群、飛鳥時代の遺構群、古墳時代後期の遺構群、古墳時代中期及び今里車塚古墳に関する遺構群が明らかになった。以下各時代ごとに概略を報告する。

〔中世以後の遺構〕

重機で1・2層除去後に遺構検出を行った結果、竹埋納暗渠1条と、中・近世溝のほか、落込みの肩を検出した（第43図）。

竹埋納暗渠は当調査区南西隅で検出し、北西—南東方向に設置されていた。断面観察の結果、2層上面から掘り込まれており、近・現代遺構であると判断した（第42図参照）。

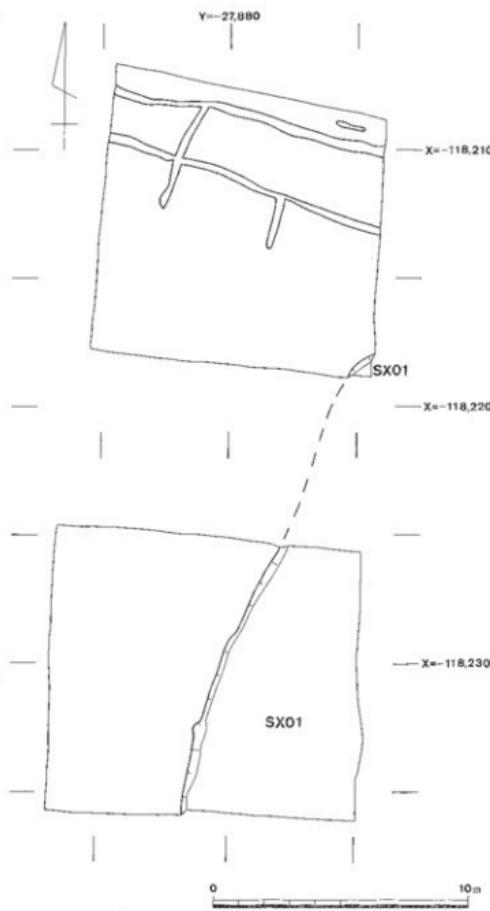
中・近世溝群は、W-20°-Nの振れ角をもつ東西方向の溝群と、それに直交方向にある南北方向の溝群である。各溝出土遺物から13世紀代の水田施設として掘られた暗渠と判断した。東西方向の溝群は、北接する現畦道に平行する。

落込みは、第1トレンチ東半部で検出した落込みSX01につながるものと考えられる。埋土には、瀬戸焼などが含まれており、安土桃山時代以後の所産と判断した。また、肩部に蛙状の高まりが残る。

このほか、第2層上面で、浅い溝状の窪みを6条平行して検出したが、近世耕作に関わるものと判断した。

〔平安時代の遺構〕

遺物を大量に含む礫層（第42図4層）を除去した面から、掘立柱



第43図 中・近世の遺構（1/200）

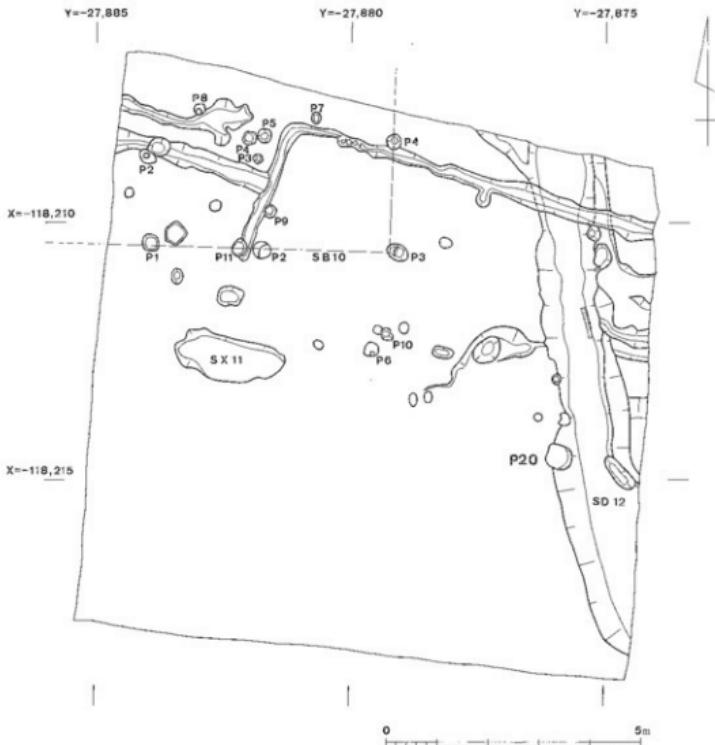
建物と思われる柱穴群のほか、まとまりの把握できなかった柱穴群や溝・浅い落込み、今里車塚古墳周濠の痕跡と考えられる傾斜した地形を検出した。周濠外のトレンチ北部は4層除去段階で大部分が黃色系の地山層になり、その上面から遺構を検出したが、周濠痕跡部分は、黒味がかかった周濠内堆積土が検出面である。柱穴や溝は全てトレンチ北部の周濠外で検出した。

掘立柱建物SB10は、柱間2.3m等間の柱穴群で、N—1°—Eの振れ角しかなく、各柱穴は、ほぼ東西または南北に並ぶ。柱根を残すものもある。他の柱穴群にも柱根を残すものがある。

浅い窪みは、今里車塚古墳周濠の名残を残す傾斜地との境で検出した北西—南東方向に長い梢円形遺構である。埋土には炭が多く混じり、布目平瓦や土器類がわずかに含まれていた。

溝は、L字形に屈曲するものなどがある。いずれも中世溝とほとんど同じ位置に掘られている。

今里車塚古墳周濠痕跡は、北西—南東方向の肩をもち、南西方向に緩やかに傾斜している。周濠痕跡は、およそW—45°—Nの方向に肩がある。周濠痕跡内には、綠釉陶器や銭貨・石製巡方などのほか平安時代の遺物を大量に含んだ湿地堆積土層がある。この時期には、沼や池のような湿



第44図 古墳時代後期から平安時代の遺構 (1/100)

潤な条件下にあった可能性が高い。そこに大量の遺物廃棄があったと察せられる。

[飛鳥時代の遺構]

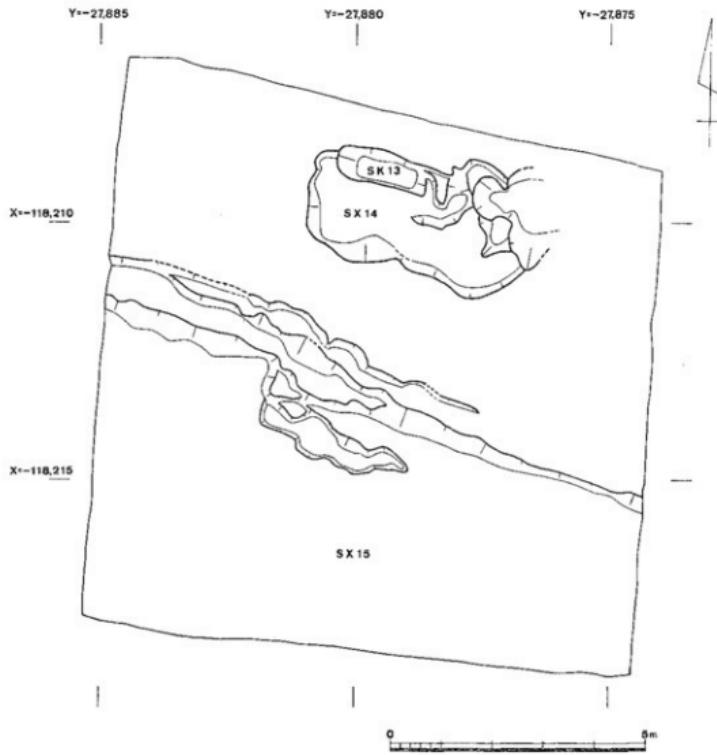
飛鳥時代の遺構には、溝SD12がある。埋土は殆ど砂あるいは砂礫で構成されており、流水速度が速い溝であったことがわかる。また一部に側板痕跡を残し、さらに側板とそれを留めていた杭が砂礫層上面に倒れた状態で見つかった（図版22-13・14・16）。当溝堆積の砂礫層は、今里車塚古墳周濠内で広がりながら薄くなってしまっており、当時古墳周濠が池になってしまっており、そこに水を流し込むように築かれた溝と考えられる。飛鳥時代の遺物は、周濠内堆積最下層にもある。

[古墳時代後期の遺構]

古墳時代後期の遺構には、柱穴状ピットP20がある。柱痕はなく、柱穴かどうか明らかでない。直径0.5m程度の円形掘形で、垂直に深く掘り込まれていた。当遺構内からは、提瓶が出土した。

[今里車塚古墳に関連する遺構]

今里車塚古墳に関する遺構には、周濠およびその北肩と、北辺の土坑SK13がある。周濠北肩部分には、当時の盛土痕跡は検出できなかった。削平を受けているためか、外堤となる高まりが



第45図 今里車塚古墳関連遺構 (1/100)

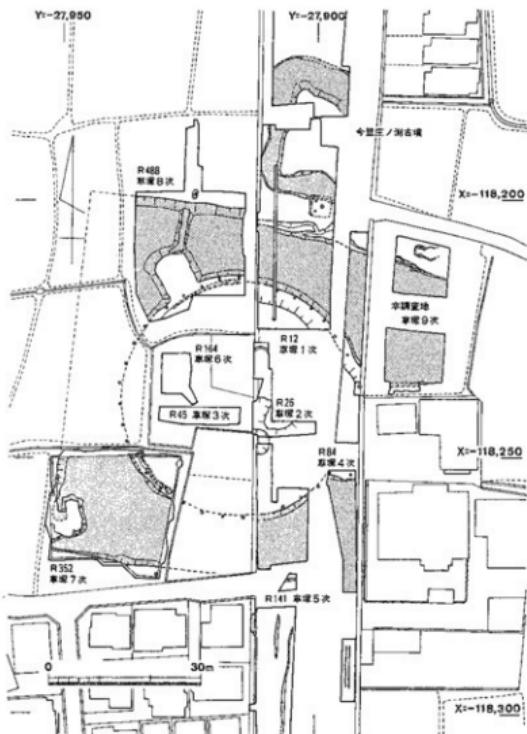
なかったのか、結論付けるにはいたらなかった。

土坑SK13には遺物が無いため確実な時期は明らかでない。今里車塚古墳に関する施設とした根拠は、古墳周濠外堤線と、土坑SK13の長軸方位が類似するからである。当土坑は平面形から土壤墓である可能性が指摘できる。

今里車塚古墳周濠外画は、北西—南東方向に検出できた。周濠の深さは約0.7mで、周濠内堆積は第42図5～9・24～30層であった。その内5層は平安時代の堆積、南東部でみられる27層(部分的な砂または砂礫堆積)は飛鳥時代の溝SD12から流出した堆積、最下層の30層は古墳築造後から飛鳥時代にかけての堆積であった。7～9・26・30層からは、第1トレーニング調査区も含めて、笠形木製品や柱材のほか、下駄や紡錘車などの木製品とともに、埴輪や土器類などが出土した。

4 まとめ

遺物整理が不十分な現段階では、詳細な検討は出来ない。平安時代については、9世紀末から10世紀前葉段階の遺物が大量に出土し、縁石陶器や輸入磁器類が含まれていることは、平安時代の乙訓寺に関連すると考えられ、宇多法皇の行宮との関わりが興味深い。また古墳時代については、今里車塚古墳に関する成果が大きい。その内の1点目は北外画線が東に伸びることが確認でき、前方部の存在が確実となった。2点目は、前方部周濠外堤幅が狭くなっていくことがわかり、大規模な前方部の存在は見込まれないことが明らかになった。3点目は、周濠内から笠形木製品が出土したことから、前方部にも木製埴輪が設置されていたことが想定できるようになった。



第46図 今里車塚古墳に関する周辺地の調査成果 (1/1000)

付表4 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	長岡京市文化財調査報告書							
副書名								
卷次	第38冊							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	木村泰彦、中島皆夫、白川成明、原秀樹、岩崎誠							
編集機関	財団法人長岡京市埋蔵文化財センター							
発行機関	長岡京市教育委員会							
所在地	〒617-0826 京都府長岡京市開田一丁目1番1号 TEL. 075-951-2121							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金原寺跡（第1次）	長岡京市 金ヶ原金原寺9-4	26209	115	34度54分 50秒	135度40分 27秒	1997.0609 ～1997.0627	110m ²	住宅建設
走田古墳群（第3次） 海印寺跡（第4次）	長岡京市 奥海印寺御神前31	26209	56 57	34度55分 23秒	135度40分 47秒	1997.1215 ～1998.0123	111m ²	墓地造成
淨土谷遺跡	長岡京市 淨土谷箱谷32、36他	26209		34度54分 29秒	135度39分 53秒	1998.0127 ～1998.0129	14m ²	墓地造成
長岡京跡（右京第566次） 開田城ノ内遺跡	長岡京市天神 一丁目34-1	26209	107 73	34度55分 19秒	135度41分 37秒	1997.0521 ～1997.0702	350m ²	駐車場造成
長岡京跡（右京第582次） 今里車塚古墳 今里遺跡	長岡京市 今里庄ノ瀬32	26209	107 31 32	34度56分 02秒	135度41分 41秒	1997.1027 ～1997.1226	120m ²	住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
金原寺跡（第1次）	寺院跡	鎌倉	土坑状落込み	瓦器、土師器				
走田古墳群（第3次）	古墳	古墳（後期）	走田10号墳の 横穴式石室	須恵器、土師器		横穴式石室の 残欠を確認		
海印寺跡（第4次）	寺院跡							
淨土谷遺跡	散布地	中世		須恵器、土師器				
長岡京跡（右京第566次）	都城跡	平安（長岡京期）	掘立柱建物	須恵器				
開田城ノ内遺跡	集落	鎌倉、室町	井戸、土坑、柱穴	須恵器、瓦器、陶器、 金属製品、嵌入陶磁器、 木製品、石製品		多彩な木製品		
長岡京跡（右京第582次）	都城跡	平安（長岡京期）		須恵器、土師器				
今里車塚古墳 今里遺跡	古墳 集落	古墳（中期） 飛鳥 平安	周濠 飛鳥溝、平安掘 立柱建物	埴輪、笠形木製品、下駄 側板、綠釉陶器、輸入磁 器、道方、錢貨		今里車塚古墳前 方部北辺裏		

図 版

金原寺跡第1次調査

図版



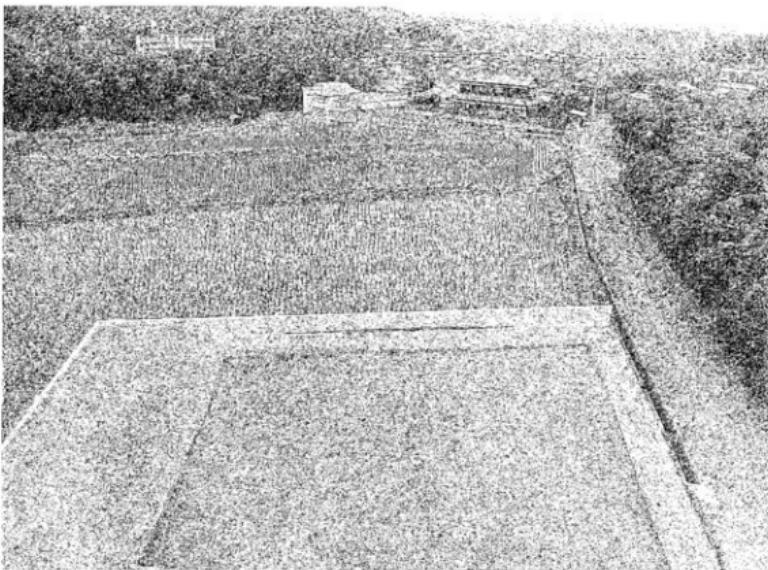
(1) 発掘調査地遠景（南西から）



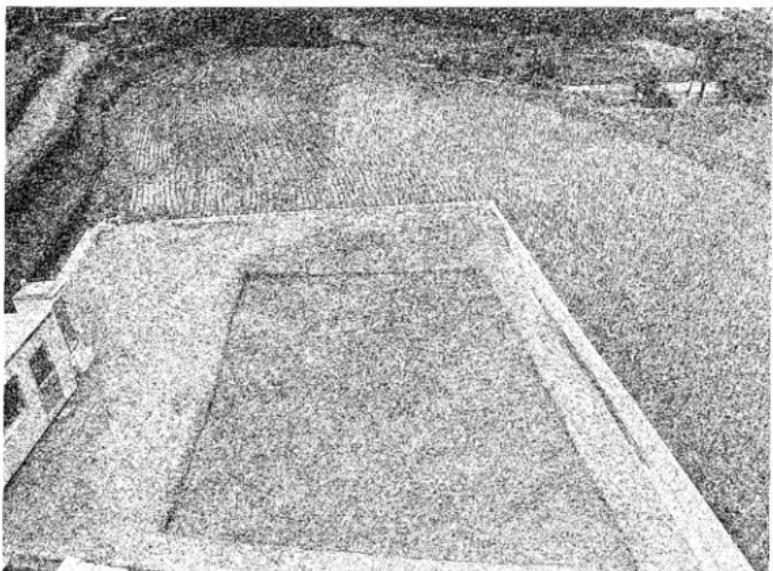
(2) 発掘調査地と土御門天皇金ヶ原陵（北東から）

金原寺跡第1次調査

図版
二



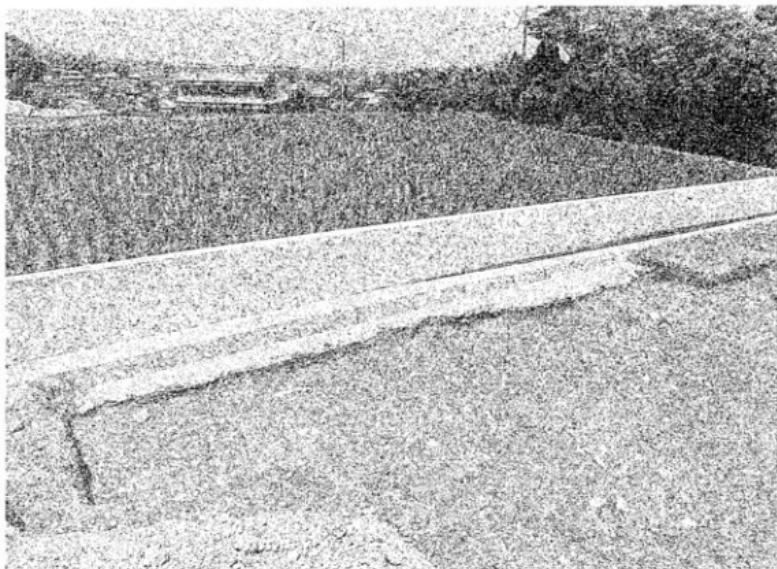
(1) 発掘調査地全景（南西から）



(2) 発掘調査地全景（南東から）

金原寺跡第1次調査

図版三



(1) 土坑 SK01 (西から)



(2) 土坑 SK01 (南から)

走田古墳群第3次・海印寺跡第4次調査

図版
四



(1) 走田10号墳横穴式石室全景（南東から）



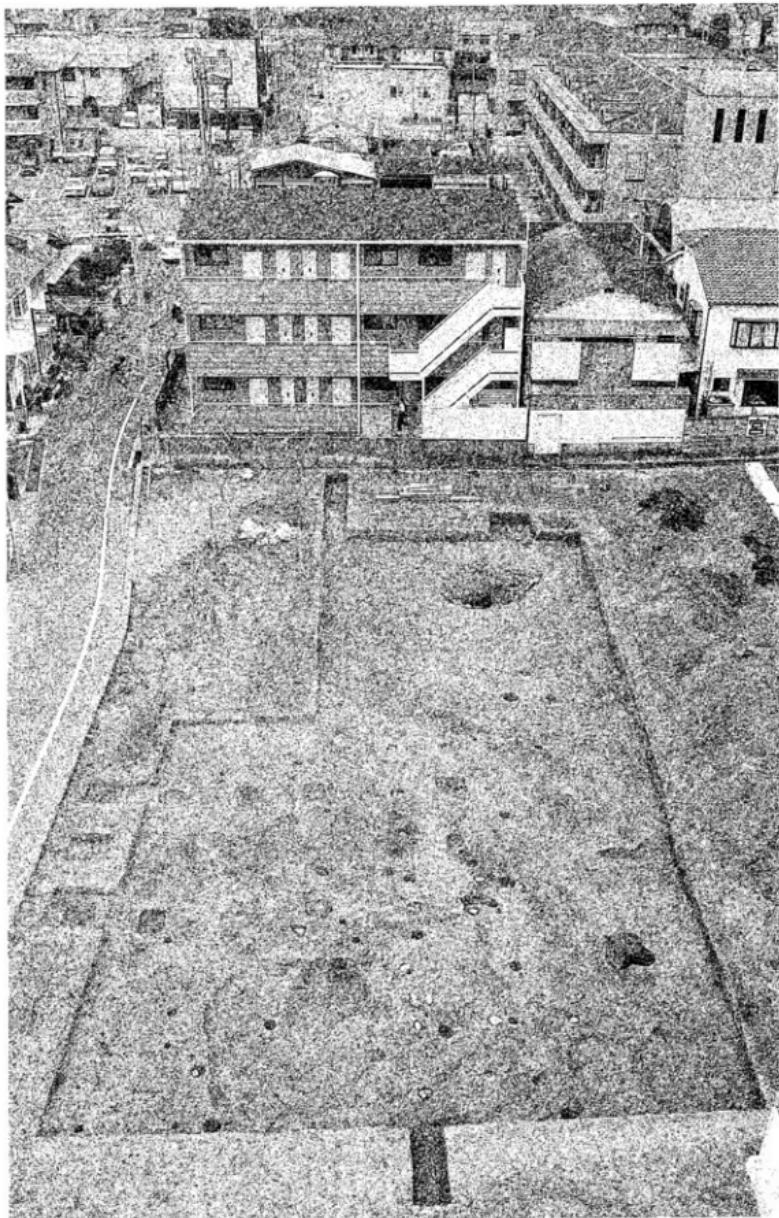
(2) 横穴式石室全景（北西から）



(3) 奥壁付近の状況（北東から）

長岡京跡右京第566次調査

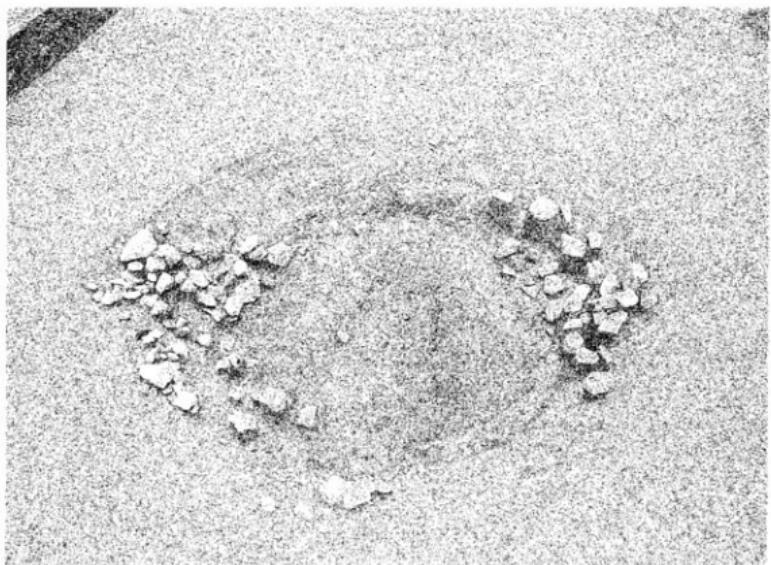
図版五



調査地全景（北から）

長岡京跡右京第566次調査

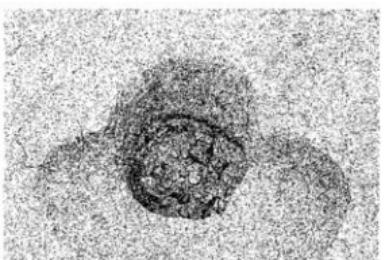
図版六



(1) 井戸 SE01検出状況（南東から）



(2) 井戸 SE01（東から）



(3) 井戸 SE08遺物出土状況（南東から）



(4) 井戸 SE08（南東から）



(1) 柱穴検出状況（北から）



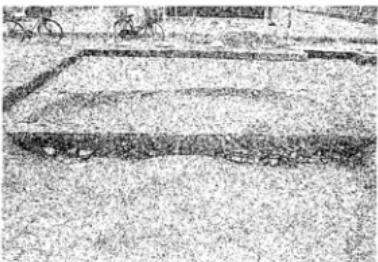
(2) 井戸 SE01断面（東から）



(4) 井戸 SE01の柄杓と獣骨



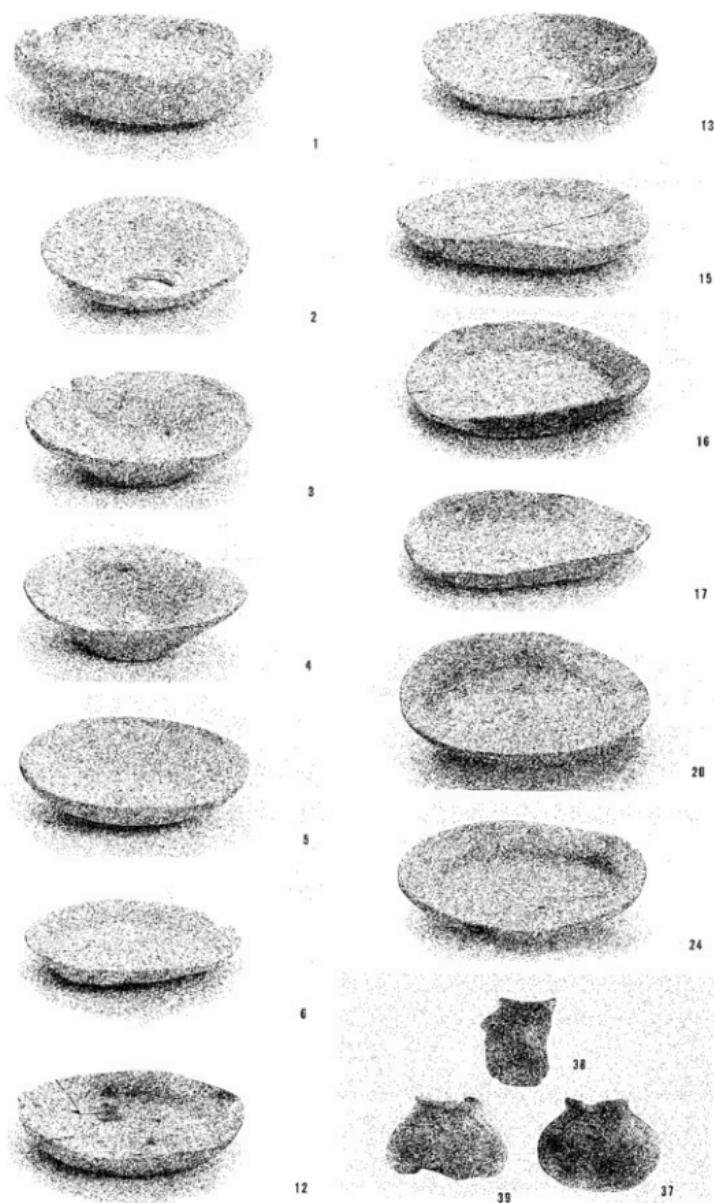
(3) 井戸 SE01のたもと横樋



(5) 土坑 SK05断面（西から）

長岡京跡右京第566次調査

図版八



土師器・瓦器

長岡京跡右京第566次調査

圖版九



11



28



14



30



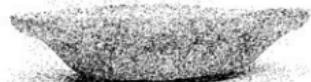
18



31



25



32



26



34



27



35



28



36



71



75

岡京跡右京第566次調査

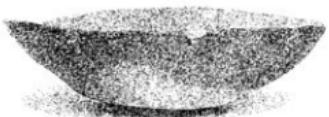
図版一〇



41



73



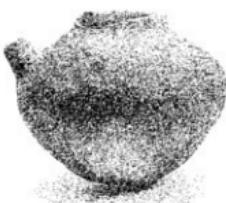
42



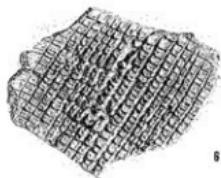
76



68



45



67



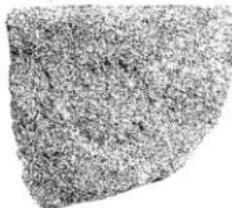
46



64



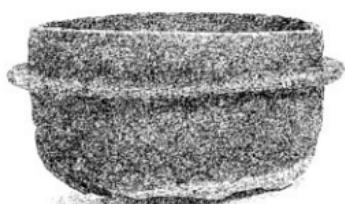
65



47

長岡京跡右京第566次調査

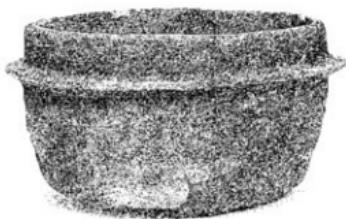
図版
一



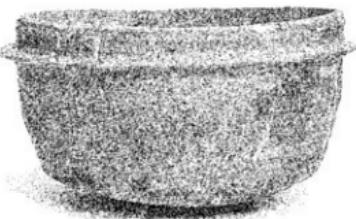
49



54



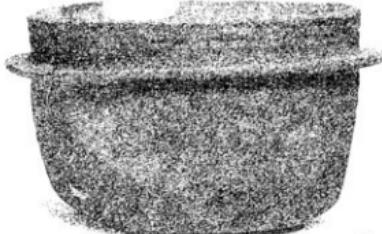
50



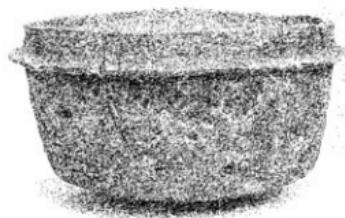
55



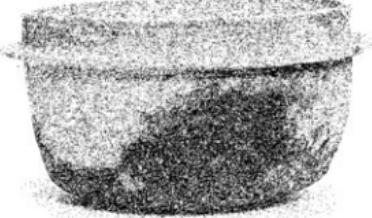
56



60



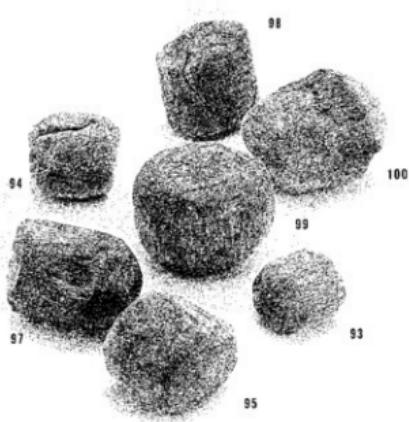
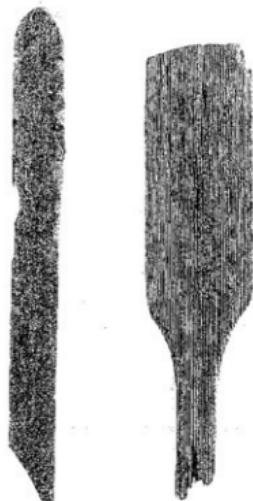
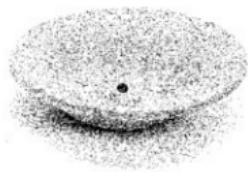
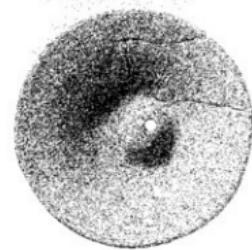
52



61

長岡京跡右京第566次調査

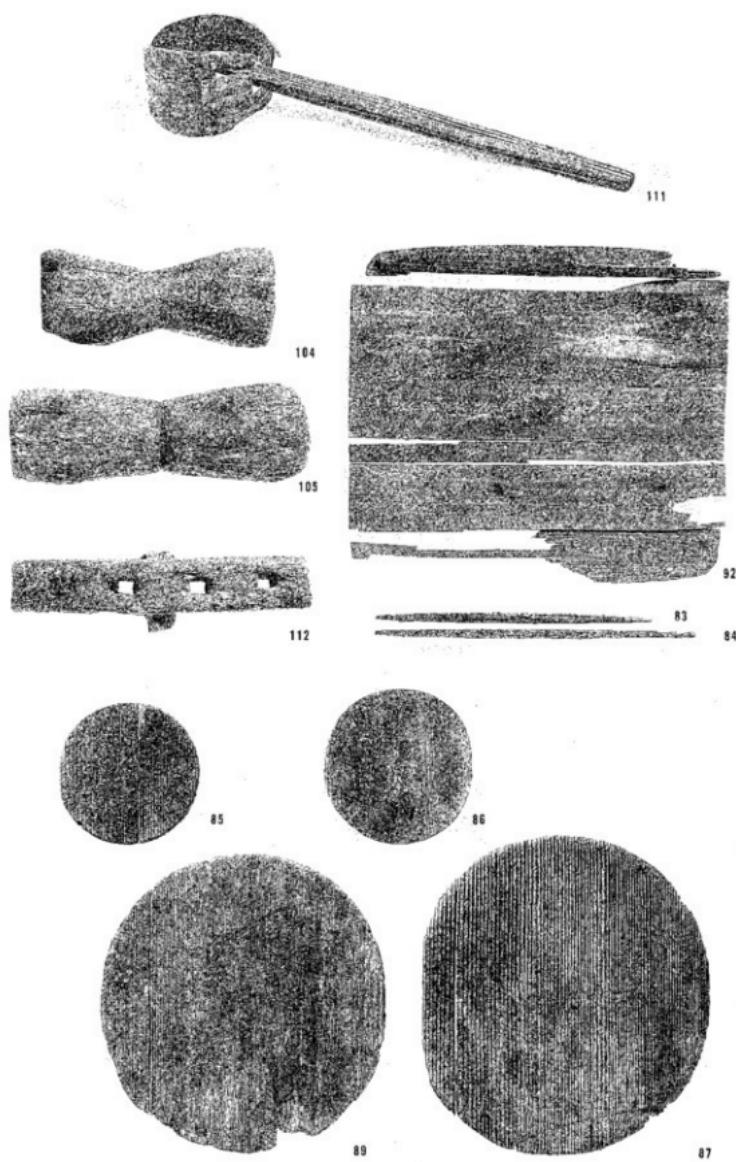
図版
一一



底部穿孔土器皿と木製品

長岡京跡右京第566次調査

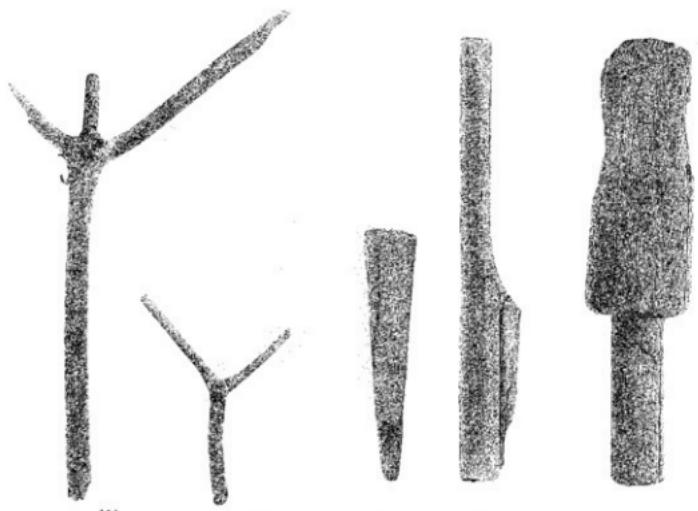
図版 I 三



木製品—1

長岡京跡右京第566次調査

圖版一四



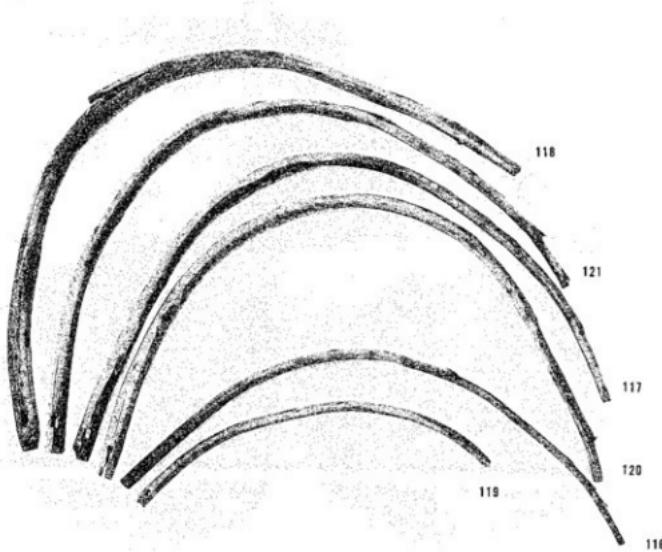
114

113

107

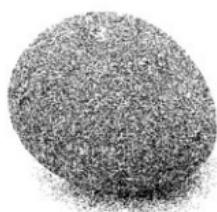
106

109



長岡京跡右京第566次調査

図版
一五



135



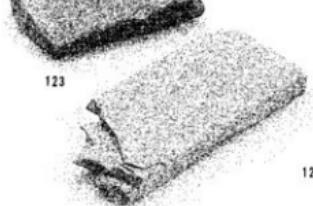
136



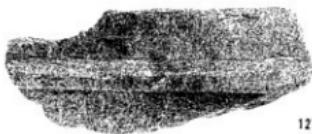
122



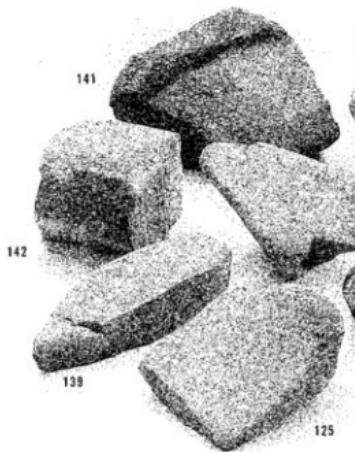
128



123



127



141

142

139

125

140

136

137

138

長岡京跡右京第566次調査

図版一六



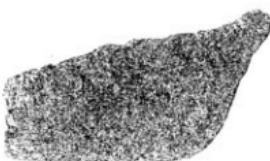
143



128



129



130



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153

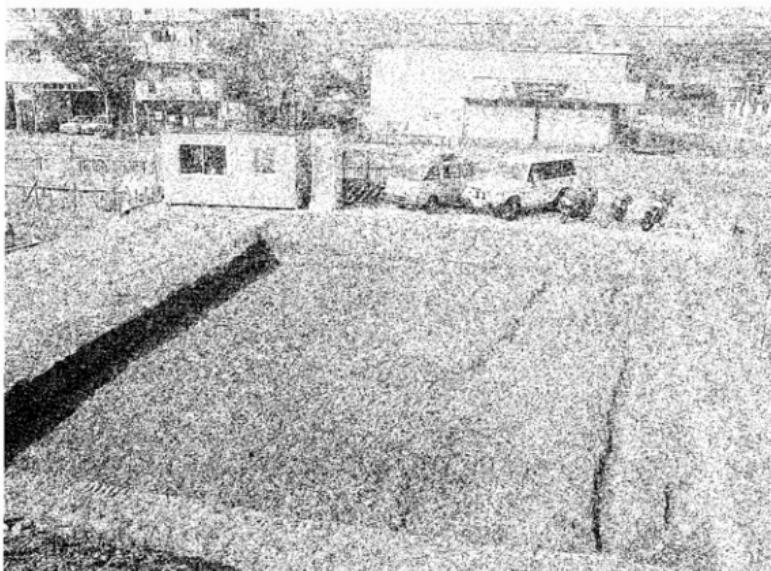
鉄製品と獸骨



調査地遠景（北西から）

長岡京跡右京第582次調査

図版一八



(1) 第1トレンチ中世遺構全景（北東から）



(2) 平安時代掘立柱建物 SB10（東から）



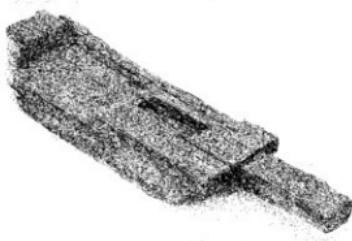
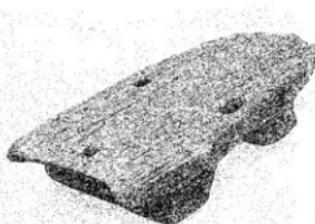
(1) 今里車塚古墳周濠北辺（南東から）



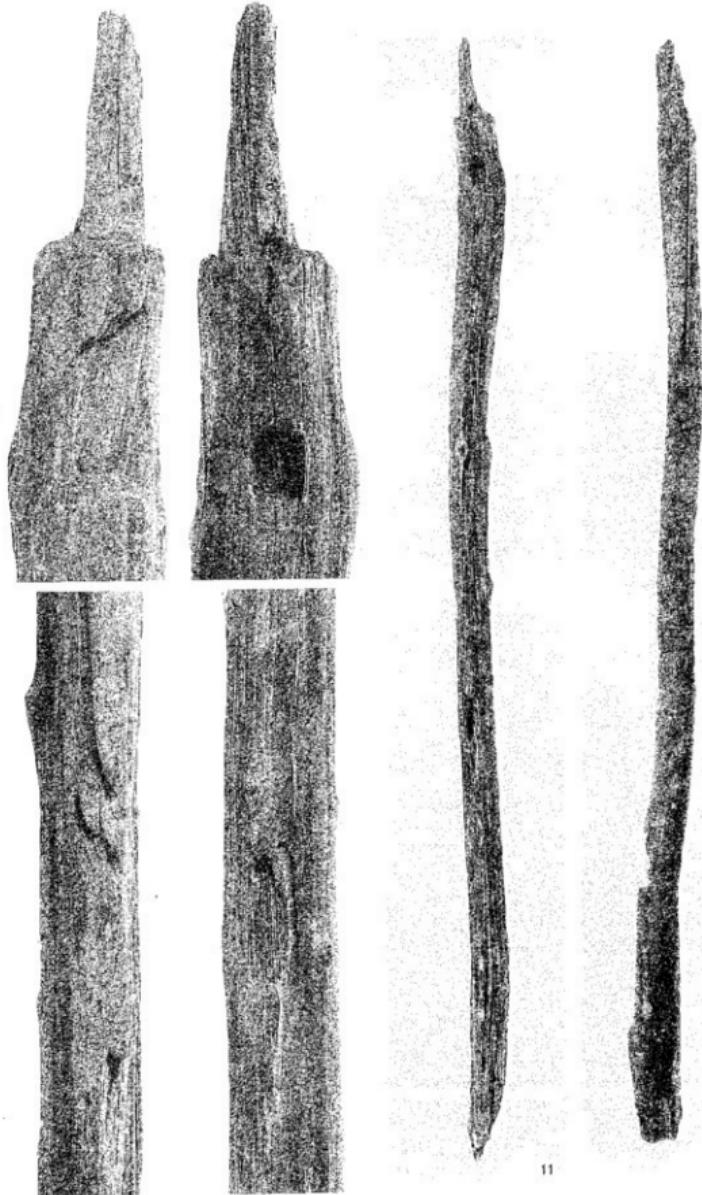
(2) 調査地近景（西から）

長岡京跡右京第582次調査

圖版二〇



今里車塚古墳周濠出土木製品



11

12

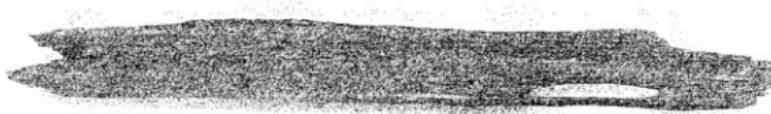
今里車塚古墳周濠出土木製品と柄部分

長岡京跡右京第582次調査

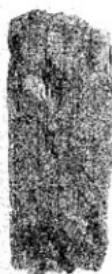
図版二二



13



14



15



16



17



18

今里車塚古墳周濠出土木製品と溝 SD12出土側板・杭

長岡京市文化財調査報告書 第38冊

発行日 平成10年3月31日

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥滝印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622

発行 長岡京市教育委員会

〒617-0826 京都府長岡京市開田一丁目1番1号

電話 075-951-2121

印刷 株式会社 国書印刷 同朋舎